動き、流れる建築のかたち

Architecture flows with us

辻 琢磨

ゆれうごく空間が涙をさそうのは、植物が死んでいくものだからというより、空間は永遠なものなのにそこだけがゆれうごいているからちょっとサミシイのだと思う。あらゆるモノが空間にそのモノのかたちではまりこんでいるが、そのひとつのモノが死んでなくなっても、だれもおどろかないで、たちどころに空間がその空間をみたしてくれる。割れたコップ。すてるとそのコップの占めていた空間はもうみたされている。多分、わたしのからだのかたちをした空間も、わたしがなくなって土にうめられて土のなかに消えるとすぐに空間でうめられて、わたしのかたちがコンクリートでうめられることはない。

思想の科学社『思想の科学 1967・9「ことば・モノ・空間」』 富岡多恵子

はじめに

普段浜松で建築活動をしている僕が、鹿児島という遠く離れた都市で仕事をする機会を得ることができました。浜松での取り組みを鹿児島の人達に体感してもらえるようなワークショップを企画してほしいと、数年前から親交のあるKCICのスタッフの市村良平さんからの御願いでした。そこで僕は結果的に一般的には建築とはほど遠い、「モノ」をテーマにした複合的なワークショップを、ミュージアムエデュケーターの会田大也さんと協働して運営しました。建築家の僕が、何故「モノ」を扱ったのか、この本のタイトルである「動き、流れる建築のかたち」という言葉の意味を詳らかにすることで、読者の皆さんにお伝えしたいと思います。この書籍は、主に三つの要素で出来ています。一つは、僕が執筆したテキスト、二つ目は、モノセレモニーズでどのようなことが行なわれたのかを整理したデータ集、三つ目は、鹿児島の画家・篠崎理一郎さんとのモノセレモニーズのコンセプトを表現したドローイングで、このウェブサイトのトップページからもお楽しみいただくことができます。これら三つの要素が多角的に、モノセレモニーズというプロジェクトと僕の建築に対する考え方の総体を表現してくれると考えています。

動き、流れる建築のかたち
Architecture flows with us

INDEX

はじめに｜5

1 つくることとこわすことのあいだ｜9

2 建築を流動状態として捉えること｜13
〈1〉移動としての相対化
〈2〉時間概念の内包
〈3〉関係性の網への意識

3 『なめらかな社会とその敵』から考える動的な社会｜16
〈1〉インターネットの登場による個の解体
〈2〉私という概念の変化
〈3〉所有概念の変化から求められる新しい制度設計
〈4〉動的な世界へ

4 神宮式年遷宮という建築のはじまり｜21
〈1〉神宮式年遷宮から考える建築行為／マテリアルの移動
〈2〉神宮式年遷宮から考える建築行為／祭

5 建築を流動状態として捉えることの実践／403architecture [dajiba]｜26
〈1〉マテリアルの流動
〈2〉渦としてのプロジェクト
〈3〉こわすことから学ぶ
〈4〉想像力を二つもつ
〈5〉パラレルワールドを生きる意識

6 動き、流れる建築のかたち／モノセレモニーズ｜37
〈1〉モノセレモニーズとは
〈2〉モノの生と死
〈3〉浜松で学んだことの「転用」
〈4〉鹿児島から学んだこと

モノセレモニーズ DATA｜49
- 実施期間
- カリキュラム
- 募集した人・モノ・場所の条件
- モノセレモニーズ概要
- 集まったモノ
- 提供された場所
- 参加した人

コンセプトドローイングについて｜71

あとがき／歓びの連鎖｜129

1 つくることとこわすことのあいだ

「石膏ボードは買うときはとても安いし便利だけど、解体して捨てる時は同じくらいの値段がかかるんだよ」
僕が浜松で事務所を構える前、2010年の冬だったと思う、空洞化著しい市街地の空き室の改修現場[fig1]を見せてもらった時に、不動産の人から聞いた言葉だ。

当時、大学院まで建築設計を学んできた僕にとって、その石膏ボードに関する些細な言葉は、聞き流されることなく、それでいて衝撃というよりもぽかんとしてしまうほどに宙を浮いていた。その違和感についてよくよく考えてみると、僕は大学院まで勉強してきたのは、建築をつくること「だけ」であったということに行き着いた。建築雑誌を眺めてみても、設計課題に打ち込んでみても、仲間と1/1でインスタレーションをつくってみても、先生に話を聞いても、先人の知恵が詰まった本を読んでも、建築をつくることに関わること以外の情報を受け取ることはできなかった。
単純にいえば、建築をこわすこと、こわし方について、何も知らないというか、考え方を知らないで過ごしてきたのである。
なにせ、僕が通っていた大学院では、山本理顕、北山 恒、飯田善彦、西沢立衛、という4教授を筆頭(2010年当時、現在は山本理顕に代わり小嶋一浩(2016年逝去、小嶋の後任は山本理顕、妹島和世、大西麻貴と2017年3月2日付で発表)、飯田善彦に代わり藤原徹平、北山 恒に代わり乾 久美子がプロフェッサーアーキテクトを勤める)にして数々の著名な建築家が教鞭を振るっているわけだし、建築をつくることの世界を切り開く建築家たちの薫陶(くんとう)を受けることが出来たのだ。非常に恵まれた環境にいたと思う。彼らからは、資本主義社会に覆われた建築家をめぐる世界はのっぴきならない状況にあるのだという危機感と、マイノリティとして生きる覚悟と、建築への信頼と、未来の豊かさを建築で構想することの大切さを学んだ。石膏ボードの値段よりもよっぽど壮大で、夢があって、生きる活力が生み出される、そういう話が連発す

[fig1]
石膏ボードが山積みにされた解体現場。2011年

る場所に僕は浸っていた。とても得難い時間だったと思っている。だが、浸りながら、いつもどこかに違和感があったのは、自分の設計課題の成績が悪かったからだけではない。どうしても、建築をつくること以外の建築に関係することが気になってしまっていたのだと思う。例えば建築に関係のない人が、建築を見たり、壊したり、使ったり、動かしたりする、そういう建築家がつくること以外の「建築」に関係あることが世界にはたくさんあるはずで、それに対して建築家が何かしらを考える必要もあるのではないかという思いが、建築家が建築をつくることの素晴らしさを実感すればするほど、強まっていった。あるいは、これまで建築家が考えてこなかったことを考えてみたい、という単純な思いから、でもあろう。

対極の意味を有しているという点において、建築家がつくること以外の建築に関係あることの最たるものが建築をこわすことであろう。何故ここまで何も考

えてこなかったのか自分でも不思議なほど、こわすという行為は建築に深く関わっているし、考えるべきことも多い。今日本の廃棄物の中で建設業のゴミの割合は20%近くを占めている。※1 建築を社会的な存在と捉えるのなら、建築することを社会的な存在として押し上げたいのなら、エネルギー資源の限界が近づく21世紀を生きる私たち建築家は、いつまでも30年で建て替わってしまう新築を建て続けることだけに注力しないで、あるいは持続可能な新築の姿を追求することだけを目指すのではなくて、建築の解体や減築、増築についても歴史に位置づけ、建築の意匠と結びつけて、建築家の言葉を与えていくミッションを抱えているのではないだろうか。

ただし、僕はこれから(日本は人口も減るわけだし)新しくつくることをやめて、こわすことだけにもっと意識を向かわせるためにこの論考を書いているわけではない。あくまでも、建築をつくることと同等にこわすことを押し上げることで、その両者の間にある関係性を明らかにし、建築行為によってできること、意識されるべきことのチャンネルを一つでも増やすことが目的である。そうすることで、建築をつくることの価値が逆説的に、あるいは相対的に高まることを期待している。
そもそもだが、建築をつくる／こわすことについて少し基本的なことを考えてみたい。両者にある関係性を明らかにするには、相違点と共通点を洗い出す必要があろう。それぞれ新築と解体を例に挙げてみよう。建築をつくるためには、材料を確保し、運び、基礎を立ち上げ、組み合わせながら固定していくことが必要とされ、設計図通りに素材が組み上がった時点で竣工となる。建築をこわすためには、構築物を重機でぐしゃぐしゃに、あるいは移築転用などの場合は丁寧に分解し、素材毎に分けて(例えば産業廃棄物と木材を)、トラックに乗せてそれぞれの処理場へ持っていくことで所謂解体は完了される。
ここで、僕なりに両者を見つめた時に共通点として認識できることは、「マテリアルを動かす」という行為によって構成されているということである。(筆者がここで素材という言葉ではなく、マテリアルという言葉を使うのは、所謂目に見える物質、建材としての素材という意味だけではなくて、建築に関係する他の要素、人や、慣習、歴史といった、コンテクスト全般を含意させたいからである。)こう考えると相違点はむしろ消え失せる。そう、両者は移動するという地平においては全く同じ行為なのだ。建築に関係するマテリアルを動かす行為、つまり移動について僕は言葉にしていきたいと考えている。あるいは、移動そのものが建築であるということかもしれない。そうすれば、新築も、解体も、増築も、減築も、一つの敷地や竣工という枠組みをを超えて、同じような言葉と存在意義で語ることができるのではないか、そしてそれは、今建築にできることとして考えられていることとまた違った価値を与えることができるのではないかという期待が僕にはある。

※1　環境省『産業廃棄物搬出・処理状況調査』

2 建築を流動状態として捉えること

〈1〉移動としての相対化

建築を流動状態として捉えるという考え方をまず説明していく。移動という概念は移動する前の始点と目的地である終点とがあって初めて成立する。始点も終点もない移動はその場での足踏み、つまり固定である。僕は、今までの建築が相手にしていたものは、この固定された要素だったのではないかと考えている。だからそれらは一つの敷地の中で単一の建築の竣工を最終地点として構想されてきた。しかし固定ではなく移動の途中として建築行為を捉え直すと、例えば、木材を材木屋から仕入れて現場に運ぶ時はもちろん移動だし、三寸柱を切断する行為も、ノコギリの刃が三寸柱と大鋸屑とに分解すると見れば移動であり、解体もまたマテリアルの移動が連続する行為である。建築行為をマテリアルの移動として捉えるために意識されるべきは、動かされるものが、動かされる前にどこにあって、どこへ来たのか、あるいは、その後どこへ行くのか、ということである。少し具体的にいえば、自分が設計した建物の梁に使われる木材はどこの製材場で加工されたのか、その前はどこの材木屋が卸したのか、どこの貯木場で保管されていたのか、その前はどこの山で伐採されたのか、そして設計した建物で使用された後はどこのチップ工場に行くのか、あるいは転用されるのか、果たしてそれは何年後なのか、そうしたことを意識するということである。ここでいうマテリアルは、上記した素材のみならず、設計にまつわるコンテクスト全般を指している。例えばクライアント、熱解析される動く粒子、慣習的な平面計画も建築を構成するための「マテリアル」として捉えられ、そのそれぞれがどういう関係性を引き連れて、どこからどこへ向うのか、を意識することが建築行為をマテリアルの移動として捉えるということである。

〈2〉時間概念の内包

移動のために始点と終点があるということを意識する時には、必然的にそこにかかる時間が（瞬間移動でもできない限り）意識される。自分が設計する建物がどういう移動要素の中継地点として機能して、それぞれの移動してくる要素のタイミングはマテリアルによって違うのか、同じなのか、その建物、というか移動要素群はどの程度その場所に固定されているのか、いつまた動き出すのか、という具合で建築を設計することに時間概念が含まれてくる。例えば山一つを丸ごとリノベーションしたかの如く壮大な計画である安土城の石垣は500年その姿を変えない、動かない時間の長い構築物だが、それに対して木造でつくられた上屋の姿は今はなく、石垣と比較すると動きやすい構築物ということになる。元来、日本では、煉瓦造りやコンクリートの文化が流入する明治維新前までは石蔵等を除くほぼすべての建築が木造だった。庶民の家も、お城も、基礎は石だが、上屋は木造だったのである。そして、地域にはそれぞれ畳屋がいて、瓦屋がいて、建具屋がいて、大工の棟梁が今でいう設計施工の工務店のように職人たちを取り仕切って、部分的に木造を改修し続けた。部分的に駄目になった部材から交換する、地域で部材が流動する木造文化があったのである。また、「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるように、多くの大火を経験した江戸の下町では、火事とその火事による改修を前提にストックの資材が家に置かれ、その度に火消しと大工がヒーローのように活躍していたといわれている。そもそも建物の部材は、流動し、うつろいゆくものという認識、つまりそれぞれのマテリアルへの時間感覚が確かにあったのである。

〈3〉関係性の網への意識

建築を流動状態として捉えることによって、マテリアルの始点、終点、時間が意識され始めると、設計行為で扱われる要素が引き連れる関係性が、設計行為をマテリアルの固定として捉えるつくり方とは違った広がりで意識され始める。一つ一つの要素が固定されたら設計が終わるのではなくて、設計とはあくまでも移動と時間の中継地点を用意することであるとするなら、一つのマテリアルがどこから来て、どこへ行くのかまでを想定することが設計なのであって、その際に設計される状況とは、一つの敷地で完結することではなく、竣工のただ一点で完結することもない。膨大な量のマテリアルの組み合わせで成立する建築が持っている関係性の網をどこまで追えるか、あるいはどこまで持続させることができるか、ということが建築を移動するマテリアルの中継

地点の集積として捉えることによって生まれる思考の展開である。そうした時に私たちが設計するのは一つの建築物ではもはやなく、そのプロジェクトが持つ関係性の網の先にある都市そのものになり得ると、少なくとも僕は考えている。

3『なめらかな社会とその敵』から考える動的な社会

僕の、石膏ボードの小さな気づきからスタートした「建築を流動状態として捉えること」の現代における意義は、果たしてどこにあるのだろうか。科学者・鈴木健が2013年に上梓した『なめらかな社会とその敵』という21世紀における予言所的な書籍を参照しながら筆を進めていきたい。

“いわばインターネットとコンピュータの歴史は、生命史を逆回ししているようなものだ。より原始的な方向へ回帰し、その複雑さを増しているのである。”※1 とあるように、この書籍において著者は、情報技術によってこれからの社会システムはより複雑で、有機的な生態系そのものに近づいていくという想定の元、“生命は自己維持するネットーワークに過ぎない”※2 としたシステム理論であるオートポイエーシス理論を軸にして、情報技術の発達を経験する人類の、所有、私、国、といった我々の思考基盤となる概念が今後「なめらか」に融解し、“複雑な社会を複雑なまま生きる”※3 ことを可能にする、そしてその変化に対応する政治制度、貨幣制度、軍事制度はいかなる代物であるべきか、というアクロバティックで誠実な立論を進める。“情報技術という新しいアーキテクチャの登場によって、ルールは書き換え可能なのである”※4 という著者の宣言は力強い。
生命は自己維持するネットワークに過ぎないという著者のオートポイエーシスの解釈は、生命は「膜」と「核」からなる個体ではなく、自己維持するネットワークシステムそれ自体であるという点において、あらゆる事象に対しての認識を「個体」から「ネットワーク」へシフトさせる。この認識の変化をまずは追っていきたい。

※1 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p186
※2 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p25
※3 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p3
※4 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p240

〈1〉インターネットの登場による個の解体

著者は、コンピュータに代表される情報技術の登場が与える我々の認識への影響について以下のように記している。

> “私たちが皮膚の境界をもってひとつの個体としてみなしがちなのは、皮膚の内側の細胞同士の相互作用の密度が、別の個体の細胞との相互作用に比べて大きいからである。ひとつの脳をもってひとつの心とみなしがちなのは、ひとつの脳の内側同士の相互作用の密度が大きいからである。個体の内側同士のほうが相互作用が強いという前提条件が崩れてしまえば、こうした常識は脆くも崩れさる。コンピュータの登場によって、物理層と認識層の間に万能のミドルウェアが提供されることにより、個体同士を超えた相互作用の可能性がつくりだされる。ある個体の細胞と別の細胞が強く相互作用するようになれば、新しい知性のかたちが生み出されるかもしれない。その姿はあるときは多細胞生物となり、またあるときは多細胞が合体してひとつの細胞となるかのようでもある。”※5

著者は、この世界におけるあらゆる相互作用の抽象化としての個体認識は、コンピュータという“万能のミドルウェア”の登場によって、あらゆる相互作用を複雑なまま認識でき、個体を超えて相互作用を図ることが可能となる複雑なネットワーク認識に変化していくとしている。これは決して技術的な話だけではない。こうした変化は、我々の認識自体に影響を及ぼす。今まで個だと思っていたものが、個を超えて関係を持つ可能性を有し、ある時は多細胞生物として、またある時は一つの細胞として、その認識が変化する、そういう有機的な世界の捉え方へ、私たちの認識自体がシフトしていくのだと著者は指摘しているのだ。

※5 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p175

〈2〉私という概念の変化

まず個人、私という概念が「個体」から「ネットワーク」へ変化する。“私がもっていると思い込んでいるものは、じつは私に関係のあるネットワークに濃淡をもって偏在している。「私」というのはその中で濃いだけの存在にすぎない。”※6 という一文にあるように、著者は、個人という概念が既存社会から勝手に与えられたもので、自分が私と思い込んでいる単一の「もの」としての私は、“じつは私に関係のあるネットワークに濃淡をもって偏在している”という解釈を提出している。この文章における私という名詞は、あらゆる事象への認識をシフトさせる上で、あらゆる名詞（国、会社、学校、家、あなた、蝶、etc）に置き換え可能である。

〈3〉所有概念の変化から求められる新しい制度設計

また著者は個体認識の変化に伴い、所有概念もより動的でなめらかにシフトすると予言する。“所有の概念は、貨幣や投票という行為が成立するための基盤を形成している。その所有概念が揺らぎ、より動的なものとして認識されると、それに伴い貨幣や投票も動的にならざるをえない”※7 とあるように、所有概念の変化が、さらに新しい貨幣システム、投票システムの構想の必要性を召還すると述べ、具体的には、「分人民主主義における伝搬委任投票システム」、「伝搬投資貨幣」という具体案を紹介している。細かな説明は割愛するが投票行為や貨幣交換行為が情報技術によってより細かく、よりダイレクトに、より相互にどこまでも関係していく、その相互作用の成果を複雑なまま享受できるような新しいシステム、とでもいおうか。これらのような性質を持った具体案は政治や経済の分野のみならず、医療や福祉、建築、スポーツ、あらゆる分野で構想されるべき類いのものであると言える。

※6 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p170
※7 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p170

〈4〉動的な世界へ

以上のような認識の変化、新しいシステムを実現するために引き起こすべき世界観として著者は以下のような提言を行っている。少し引用が長くなるが、確信を捉えた重要な、この書籍の総まとめとも受け取れる提言であるため、ご一読頂きたい。

> “社会を建築するとは、単に制度をデザインすることではなく、その中で起き

る人間の認知システムや世界の見え方に変化を引き起こすようなメディアをつくりだすことにほかならない。
では、どのような世界観を引き起こすべきなのだろうか。それは2つの想像力である。想像力という言葉は多少弱すぎるきらいがある。むしろ、2つの身体性の変化というべきかもしれない。

第一に、他者の立場に立つこと、あるいは他者を自分の身体の延長として感じることである。その社会にいる人々は、自らを皮膚に覆われたひとつの身体としてだけではなく、ソーシャルネットワーク上をどんどん広げていって世界全体に近いところまで感覚を拡張し、そしてまた個体レベルにまで戻ってくることが自由にできる。また、個体レベルから下に降りていき、自分という存在がひとつではなく、多様な細胞たちの集積であり、多くの欲望と主体の塊であることを認識する。それはあたかも、チャールズ・イームズ(デザイナー)の「パワーズ・オブ・テン」を日常世界で実感できるようなものである。

第二に、たしかなものなど何もないという感覚である。たしかなものがあるという感覚が社会的に集積すると、その幻想を信じた結果として大きな破綻を生み出すことになる。たしかなものなど何もないという感覚とは、存在を感ずることを通じて非存在に想いを馳せ、非存在によって存在を想像する、いわば「うつろい」の感覚といってもよいだろう。生成と崩壊を自明とみなすこと、所詮は世界全体を引き受けることなどできはしないと諦観すること、想像力のもつ力の限界を感じること、これらの認識は「うつろい」の感覚によって生じる。

第一を空間的というならば、第二は時間的である。いわば、社会的新体制の拡張と収縮を自在に可能としつつ(空間的)、その身体感覚の限界と非不変性を感じる(時間的)。この2つは互いが互いを強化しあい、ひとつの時空間的感覚を生み出す。”※8

自分という実感はどこまでも拡張／伸縮可能なネットワーク空間であり、そうした実感を通したいかなる存在もうつろいいく時間を有している、そうした意識をこれからの世界観として著者は提示している。僕は、この発言に全面的に同意する。建築においてはまさに「建築を流動状態として捉えること」がこの世界観にフィットしていると考える。試しに上の一文「自分という存在はどこまでも拡張／伸縮可能なネットワーク空間であり、そうしたいかなるネットワーク空間もうつろいいく時間を有している」に建築を当ててみよう。「建築はどこまでも拡張／伸縮可能なネットワーク空間であり、そうしたいかなるネットワーク空間もうつろいいく時間を有している」。これはまさに、「建築を流動状態として捉えること」における、建築個体を超えた関係性の網の意識と、時間概念の導入に他ならない。時間の止まった個体としての建築ではなく、時間を含んだネットワークとしての建築へのシフトが、なめらかな社会に求められているのだ。

※8 勁草書房『なめらかな社会とその敵』鈴木健 p212

4 神宮式年遷宮という建築のはじまり

上記のような建築を流動状態として捉えることが実践されている建築の始原を紹介したい。伊勢神宮における神宮式年遷宮である。広義での伊勢神宮の所在地は三重県内の4市2郡に分布する125の社宮を「神宮」と総称しているため分散型の配置となっているが、狭義には太陽を神格化した天照坐皇大御神（天照大御神）を祀る皇大神宮（内宮）と、衣食住の守り神である豊受大御神を祀る豊受大神宮（外宮）の二つの正宮を指す。伊勢神宮は2013年に、式年遷宮を迎えた。式年遷宮とは125社の内摂末社を除く内宮外宮含め56棟を20年毎に全く同じ形の社を隣の敷地に建て、20年毎に神様を移し続けるという現在まで1300年間続けられている神宮最大の行事である。この20年に一度の「建て替え」について、マテリアルの移動と祭という二つの視点から、建築を静的な固定状態ではなく動的な流動状態として捉えることによる思考展開の実践としての神宮式年遷宮を見ていきたい。

〈1〉神宮式年遷宮から考える建築行為／マテリアルの移動
僕がまず着目するのは式年遷宮に置けるマテリアルの移動である。

下記『Wikipedia「神宮式年遷宮」』より抜粋
〈用材〉
遷宮においては、1万本以上のヒノキ材が用いられる。その用材を伐りだす山は、御杣山（みそまやま）と呼ばれる。御杣山は、14世紀に行われた第34回式年遷宮までは、3回ほど周辺地域に移動したことはあるものの、すべて神路山と島路山、高倉山という内宮・外宮背後の山であった。その後、内宮の用材の御杣山は第35回式年遷宮から三河国に移り、外宮の用材の御杣山は第36回式年遷宮から美濃国に移り、第41回式年遷宮から第46回式年遷宮までは伊勢国・大杉谷を御杣山とした。この伊勢国大杉谷は、徳川御三家の一つ・紀州徳川家の領地である紀州藩にあった。しかし、原木の枯渇による伐り出しの困難さから、第47回式年遷宮から、同じ徳川御三家の一つ・尾張徳川家の領地である尾張藩の木曾谷に御杣山は移された。以後、第51回式年遷宮のみ大杉谷に戻ったものの、300年以上にわたり木曾谷を御杣山としている。明治時代には、木曾谷を含む尾張藩の森林は国有化された。明治時代後期から大正時代にかけて、木曾の赤沢をはじめとする地域に神宮備林が設定され、樹齢200年から300年の用材の安定提供を可能とする計画的植林が行われ始めた。第二次世界大戦後、神宮備林の指定は外されたものの、以後も遷宮用材の主な供給地となっている。神宮では、1923年（大正12年）に森林経営計画を策定し、再び正宮周辺の神路山・島路山・高倉山の三山を御杣山とすべく、1925年（大正14年）または1926年（大正15年／昭和元年）から、三山へのヒノキの植林を続けている。遷宮の用材として使用できるまでには概ね200年以上かかるため、この三山の植林から生産された用材が本格的に使用されるのは110年以上後の2120年頃となる。また、この計画は、400年後の2400年頃には、三山からの重要用材の供給も目指す遠大なものである。なお、内宮正殿の御扉木について、本来の様式通りに一枚板とするためには、樹齢900年を超える用材が必要となると試算されている。2013年（平成25年）に行われる予定の第62回式年遷宮では、この正宮周辺三山からの間伐材を一部に使用し、全用材の25%が賄われる。
さらに、明治100年記念として神宮が購入した宮崎県・鹿児島県の記念林は、当初の目的は財政補給であったものの、ヒノキの生産に適していると見られることから、三山および瀧原宮の神域林とあわせて、用材の供給源となることが期待されている。
式年遷宮の際に解体される旧殿に使用された用材は、神宮内やその摂社・末社をはじめ、全国の神社の造営等に再利用される。例えば、内宮正殿の棟持柱については宇治橋神宮側鳥居となり、さらに関の東の追分の鳥居となる習わしである。また、外宮正殿の棟持柱は宇治橋おはらい町側鳥居となり、さらに桑名の七里の渡しの鳥居となる習わしである。

着目すべきは、三点ある。
一つは、これまですべての式年遷宮において使用される用材がどこから来ているのかが明らかにされているという点。もう一つは、式年遷宮が終わった

後、解体された材が転用される場所が二代先まで決まっている点である。この二点は、式年遷宮で建てられた社だけが終着点なのではなくて、膨大な量のマテリアルの組み合わせで成立する建築が持っている関係性の網をどこまで追えるか、あるいはどこまで持続させることができるか、ということを確かに実践している。三つ目は、この形式が1300年もの間持続しているという圧倒的な事実である。

〈2〉神宮式年遷宮から考える建築行為／祭

さらに、式年遷宮においては、社を建立するという建築行為に関係する行為が、30回を超える祭として形式化されている。下記のような祭が実際に20年かけて行われる。

下記『Wikipedia「神宮式年遷宮」』より抜粋

山口祭｜用材を切り出す御杣山の山口にある神を祭る儀式。

木本祭｜心御柱にする木を切り出す前に、その木の神を祭る儀式。

御杣始祭｜御樋代（御神体を納める容器）にする木を切り出す行事。

裏木曽御用材伐採式｜御樋代木は裏木曽でも切るため、その安全を祈願する。

御樋代木奉曳式｜木曽から切り出された御樋代木を伊勢到着後両宮境内五丈殿まで運び入れる儀式。

繰り糸はじめ式｜愛媛県西予市の製糸工場にて、御神宝・御装束に使う生糸の生産開始にあたり行う。

御船代祭｜両正宮および別宮の御樋代を納める御船代の用材を切り出すにあたり行われる儀式。

御装束神宝御料織初式｜京都府京都市上京区にある織物工場で、御装束・御神宝の織り初めにあたり、祝詞奏上・雅楽奉納・清祓などを行う。

御木曳初式｜御木曳行事の皮切りとして両宮正殿垂木などの重要な用材を、特定の「神領民（江戸時代以前の伊勢神宮領地の住民）」が運搬する儀式

木造始祭｜造営工事の開始にあたって作業安全を祈る儀式。

御木曳行事｜御木曳行事の皮切りとして両宮正殿垂木などの重要な用材を、全神領民が運搬する儀式

仮御樋代木伐採式｜旧殿から新殿まで御神体を遷す際に御神体を入れる「仮御樋代」と「仮御船代」にする用材を切り出す儀式。

鎮地祭｜新宮建設予定地で作業安全を祈る儀式。一般の地鎮祭に相当。

宇治橋修造起工式｜橋の架け替えを前に工事の安全を祈願する。

仮橋修祓｜仮橋完成時に安全祈願のお祓いをする。

宇治橋渡納｜架け替えられる宇治橋の最後の通行を儀式化。

宇治橋萬度麻奉下式｜宇治橋解体前に擬宝珠内に納められている萬度麻を下げる。

宇治橋渡始式｜橋の安全祈願。橋を守護する饗土橋姫神社で祈願した後、萬度麻を擬宝珠に納める。

立柱祭｜正殿の柱を最初に立てる儀式。

御形祭｜御形（正殿の妻の束柱の装飾）を穿つ儀式。

上棟祭｜正殿の棟木を上げる儀式。

檐付祭｜新殿の屋根の萱を葺き始める儀式。

甍祭｜新殿の屋根を葺き終える儀式。

お白石持行事｜宮川河原から採集した「お白石」を御木曳同様に陸曳・川曳で運び、正殿用地に敷き詰める行事。

御戸祭｜新殿に扉を取り付ける儀式。

御船代奉納式｜御船代を正殿内に納める儀式。

洗清｜新殿内を洗い清める儀式。

心御柱奉建｜心御柱を新正殿床下に立てる儀式。

杵築祭｜新殿敷地を撞き固める儀式。

後鎮祭｜新殿敷地の平安を祈る儀式。

御装束神宝読合｜遷宮に合わせ作り替えられた御装束と御神宝を読み合わせる儀式。

川原大祓｜「仮御樋代」・「仮御船代」・御装束神宝や遷御参加者を祓い清める儀式。

御飾｜殿内装飾。

遷御｜御神体を旧殿から新殿へ遷す儀式。

大御饌｜新殿において、初めて大御饌を奉る儀式。

奉幣｜天皇から奉られる幣帛を奉納する儀式。

古物渡｜旧殿内の神宝類を新殿の西宝殿に移す儀式。

御神楽御饌｜御神楽に先立ち大御饌を奉る儀式。

御神楽｜天皇から派遣された宮内庁式部職の楽師が御神楽などを奉納する儀式。

このように式年遷宮ではただ建築をつくるのではなくて、建築をつくる行為や要素が引き連れる関係性を意識化するためにこれだけ多くの建築行為やそれに付随する行為が祭として形式化され、継続されているのである。現代における上棟式にあたる祭はもちろんのこと、木を切り出すための山に入るためのお祭や、庭に蒔く石を敷き詰める祭や、神様が引っ越しされる時に使用される仮の社の用材を切り出す祭、儀式で使う装束のための生糸を生産する時の祭、それらを、多くの手間と人と時間をかけて行うのである。大工技術だけではなくて、伊勢神宮という建築を取り巻く関係性の網を、祭によって意識化し、保存し、後世に伝承していく、そのシステムの蓄積は「建築を流動状態として捉えること」による思考展開と驚くほど酷似している。さらにいえば、伊勢神宮では式年遷宮以外でも五穀豊穣の感謝祭にあたる神嘗祭を代表として日常的に毎年1500回を超える祭が行われている。日常が持っている関係性をなるべく意識化しておく術を祭によって体現しているのである。

「建築をつくるという行為には単なる形だけではなくて、これだけの関係性が詰まっているのですよ、その関係性の網は、何も建築に限らず、あなたの日常すべてに関わっているのです、だから、自分で完結しようとせず、関係性の中で生かされていること、そしてその関係性の網には、時間軸もあって、だから過去に起こったすべての出来事も未来に生まれるだろう子孫も、丸ごと尊敬して生きなさい。」そうお伊勢様がいっているように僕には聞こえる。

5 建築を流動状態として捉えることの実践／403architecture [dajiba]

ここまで、石膏ボードの気づきから始まって、建築をつくることとこわすことをマテリアルの移動として捉えることによる思考展開を、移動としての相対化、時間概念の内包、関係性の網への意識という順で整理し、その現在的意義を、鈴木健氏による『なめらかな社会とその敵』に求めた。そうした思考展開の建築における実践の始原として、伊勢神宮における神宮式年遷宮で1300年もの間続けられていたことも言及した。ここからは、その動的な思考展開が今においてどのように実装されるかを、自分たちの活動を通して記していきたい。僕は、2011年の4月に、橋本健史、彌田徹と三人で静岡県浜松市で設計事務所403architecture [dajiba]（以下403）を立ち上げ、ここまで丸6年、活動してきた。その間、建築というには本当に小さなプロジェクトを主なフィールドとして30を数える程度展開してきた。

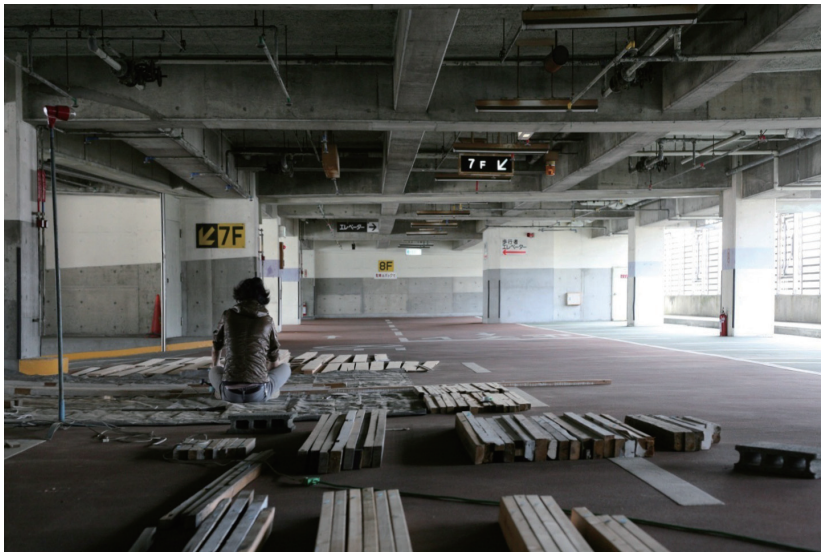
〈1〉マテリアルの流動

僕たちは、マテリアルの流動を意識して、浜松で「建築」を設計している。建築といっても、寝室の床や美容室の中にある休憩室や、インテリアショップのための家具庫、眼鏡屋の什器を含む内装設計、雑貨屋のためのカウンターテーブル、建築とはとてもいえないほど小さなものが多いということが特徴の一つとして認知されている。しかし、マテリアルの流動ということを意識した時、そのそれぞれのプロジェクトはマテリアルによってお互いが連動し、そうして生まれるプロジェクトの関係性の網そのものが僕たちにとっての建築と呼ぶべきものとして立ち現れるのである。マテリアルの流動とは、建築行為を一生そこに固定すべきコロシ（FIX）行為ではなく、一時的にその場に固定されているという行為として捉えるという前提の下、建築単体を超えたマテリアルのネットワークを設計するためのキーワードである。どういうことか、僕たちのプロジェクトを補助線にして説明していく。

〈三展の格子〉[fig1]というプロジェクトは、浜松市市街地にある美容室のため

[fig1]
〈三展の格子〉2011年

[fig2]
〈三展の格子〉に転用された木造のロフト 2011年



[fig3]
工房として利用された立体駐車場 2011年

[fig4]
〈頭陀寺の壁〉2011年

の休憩スペースのためのプロジェクトである。床面積は2㎡。クライアントからは視線が美容室を利用するお客様から遮られていること、飲食ができること、仮眠ができること、という条件を頂いた。さらに、資材にはその美容室が入居する建物の屋上にある小屋、の中にある木造ロフト[fig2]を解体して調達してほしいとお願いされた。僕たちは、早速この木造ロフトを解体し、オーナーが知り合いの近くの立体駐車場に持ち込み、採寸し、資材の総量を把握してから設計を始めた[fig3]。採寸したすべてを図面データ化し、それをコンピュータ上で組み合わせる。屋根があり風も通る立体駐車場は徒歩三分の広々とした工房としても機能し、搬出入にも大変役立った。こうして〈三展の格子〉は出来上がったわけだが、この時ロフトの解体で出た資材からは余剰材も出た。我々はこの余剰材の行く末を考えた。次はどこへいくべきだろうかと。時期を同じくして〈頭陀寺の壁〉[fig4]というインテリアショップのための家具庫の計画が進んでいた。ショップの庭に設けられたこの小さな家具庫は、運送会社に問い合わせ譲って頂いたフォークリフト用の木製パレットの解体材を張り合わせた構造壁を持つ。この構造壁のつくり方は、パレットだけではなくて他の様々なメンバーを持った部材も組み合わせることができる。私たちはここで、〈三展の格子〉で出た余剰材を〈頭陀寺の壁〉でも流用した方が構造的にも安定し、意匠としてもバランスがとれるという判断を下し、プロジェクト同士のマテリアルの流動による連動を試したのである。この二つのプロジェクトのクライアント同士は旧知の仲であり、僕たちとも普段から付き合いがある、クライアントというよりは友人、兄貴、先輩のような存在で、こうした関係性によってもプロジェクト同士の連動、マテリアルの流動はよりスムーズに担保された。

〈2〉 渦としてのプロジェクト

RADという京都を拠点に活動する同世代のリサーチグループからインタビューを受けた時に、「403のプロジェクトは地域という海の中で渦のような存在だね」と指摘され、なるほどなと関心したことがある。渦というのは、渦単体だけで存在しない。周囲の海があって初めてその一部として成り立つ。そして、どこからどこまでが渦なのかということがはっきり掴めない。渦の中心から離

[fig5]
事務所が入居する渥美マンションの外観　2011年

れていくといつの間にか流れが穏やかな水面になっているのが渦という現象だ。僕たちのプロジェクトは今のところ内装やカウンターテーブルや看板や休憩室や床や壁や天井など、建築物というよりその部分としての構築物であることが多い。しかしながら、設計行為をマテリアルの流動として捉えたとき、そのプロジェクトが持っているあらゆる関係性のネットワークが意識されると同時に、僕たちがつくり出すプロジェクトを通した現象は、その関係性のネットワークに変化を与える。関係性を組み替えたり、つなげたり、あるいは切ったりと、プロジェクトとその回りに存在する様々な関係性の網は、渦とその回りの水面の関係のように刻一刻とその姿を変えながら、その関係性の網のことをあえてコミュニティと呼ぶとするなら、コミュニティにおける特異点として維持されていく。

例えば、僕たちの事務所が入居するこの「渥美マンション」[fig5]は、50年ほど前に建てられたRC造の6階建てで、4階を僕たちが使っているのだが、6階

には〈渥美の床〉[fig6]という天井の野縁材を床に転用したプロジェクトがある。このクライアントは、〈三展の格子〉のクライアントでもある美容師さんで、僕たちと同時に入居し、僕たちに寝室の床を御願いしてくれた。この「床」のプロジェクトがきっかけとなり、店舗の休憩スペースとして「格子」も設計することになったのである。また、この美容師さんが退去した後は、僕の高校の同級生が住みはじめ、その友人が今度は同じ住戸内の別の場所に〈渥美の扉〉[fig7]を頼んでくれた。またこの空間には僕らよりも一回り下の+ticという建築ユニットが設計施工した〈FOUNDATION〉[fig8]というプロジェクトもあり、それもこの友人がクライアントになっているものだ。つまりこの住戸の中にはクライアントも設計者も違う複数のプロジェクトが同居しているのである。このようなプロジェクトの連鎖は、この空間に限ったことではなく、浜松の市街地を中心にして、素材と人が偏在するネットワークの渦として確かに起こっていることなのだ。僕たちのプロジェクトは、単なる構築物であることを超えて、渦として、もしその渦がなかったらどうなっていたかに対する想像力を喚起するような存在となることを目指している。その一つ一つの渦は式年遷宮における30余の祭のような存在ということが言えるのかもしれない。

〈3〉こわすことから学ぶ

以上のようなこの6年間の浜松での実践は、僕の建築観を大きく醸成した。どこの事務所にも務めずに独立してしまった僕たちは、ほとんど何も知らない状態から建築を始めたので、これが建築であるという前提はほぼなかった。だから何かの気づきを得るたびに、これも建築なのか、あれも建築といえるかもしれないという発見を浜松にあるあらゆる要素からもらったように思う。人からも、モノからも、場所からも、本当に多くを学び続けている。その総体としてもし「浜松さん」という主体を設定できるのであれば、僕の師匠は明らかに浜松さんである。例えば、内装の解体時には、釘抜きとバールだけでこわすことが可能なのだが、そのためにはその構造体が組み立てられた順序を理解して、逆から壊していくと綺麗に、無理なく解体できることを学んだ。廃材の転用がプロジェクトの前提となっていた〈三展の格子〉における木造のロフトや〈渥美の床〉における天井の野縁材を解体する時には、まずその仕組みや大

[fig6]
〈渥美の床〉2011年

[fig7]
〈渥美の扉〉2014年

[fig8]
〈FOUNDATION〉 2013年

[fig9]
〈頭陀寺の壁〉で利用するパレットの解体風景。パレットの釘は非常に太くほぼ錆びていてとても抜きにくい。2011年

工の痕跡を見るようにした。そうすることで、木造の仕口*1や継ぎ手*2の形状、胴縁*3、野縁*4、根太*5といった部材の名前や役割を覚えたり、釘の頭が何故平たく円形をしているのかや、釘抜きのかたち（角度や長さ、釘を掴む溝の断面形状、重さ）が大変に洗練された知の集積の結果であることを身体で理解した[fig9]。またその仕組みを理解することで、釘を抜くという行為が如何に日常的なものだったかを想像し、木造という構造形式が如何に「動かしやすい」ものとして日本で受容されてきたのかを再確認したのである。

---

*1 仕口　二つの木材を直角に接合する方法、あるいはその接合部の刻みをいう。
*2 継ぎ手　二つの木材を長さ方向に接合し、材同士を継ぐ方法、あるいはその接合部の刻みをいう。
*3 胴縁　壁の面材を打ち付けるための下地で、柱間に渡す幅の狭い横木。
*4 野縁　天井面材を打ち付けるための下地、格子状になっていることが多い。
*5 根太　床板を支える下地材。

〈4〉想像力を二つもつ

「建築」以外の出来事からもよく学んでいる。事務所を始めた当初、少し苦い経験があった。自分で企画した建築のレクチャーが、お世話になっている蕎麦屋さんで行われることになっていたライブの日程と重なって集客の取り合いになってしまい、せっかくのイベントが共倒れになりかけてしまったのだ。自分は街のために良かれと思ってイベントを企画したのだが、蕎麦屋さんの立場での想像力と情報共有が欠けていたのが仇となった。この反省を機に、一つの行為が及ぼす影響にできる限り想像力を働かせようと心がけるようになった。自分の行動や言動の影響は必ず誰かに影響を与えるという前提に立って振る舞う心構えや、誰も不快にさせないような判断の仕方については、商売人の兄貴たちから学ぶことが多い。同じようなことを、建築についても考えるようになった。一つの敷地のなかだけを考えていても、建築全体の広がりにはつながっていかない。敷地内にだけ、浜松にだけ、あるいは自分にだけ、現在にだけ向けられていた想像力を、他の場所や人間や時間にも向けることが大切だ。浜松の市街地がにぎわっていても、その人たちがやってきた郊外や周辺の地域は寂れているかもしれない。移住者が増えて浜松の人口が増えていても、彼らがもともと住んでいたどこかの都市の人口は減っているかもし

れない。日本の経済が上向いたとしても、その成長の裏には発展途上国の疲弊があるかもしれない。一つの対象に対して一つの想像力を当てはめるのではなく、同時に二つの想像力を駆使し、そのあいだに立って自分の行動を判断する、そうした想像力の持ち方を僕は確かに浜松の商売人から学んだ。

〈5〉パラレルワールドを生きる意識

この論考の前半で『なめらかな社会とその敵』に言及した際“自分という実感はどこまでも拡張／伸縮可能なネットワーク空間であり、そうした実感を通したいかなる存在もうつろいいく時間を有している”その意識がこれからの世界観をつくっていくという僕なりの解釈を示した。今認識されるものだけに意識を置くのではなく、その背後に広がるうつろいゆく関係性の網を意識したとする。すると、今認識されている自分や、世界や、建築は、一つの可能性の断面でしかなく、その背後にはうつろいゆく膨大な関係性の網の変化がある。そしてどうやらそれは私たちの想像力を超えて連動する、自然現象のような塊として意識される。この時、私たちが今見ているもの、意識している世界、つくろうとしている建築は、膨大な関係性の中でたまたま立ち現れた可能性の一つでしかなく、それ以外の膨大な可能世界が同時に立ち現れる。あり得たかもしれない世界、価値観を意識下におくことができるようになる。あたかもパラレルワールドを生きるように私たちの価値観はシフトしていくはずだ。僕たちはマテリアルの流動の実践において、度々素材を転用している。賃貸住宅の一室の改修計画〈渥美の床〉では、それまで吊り天井を構築していた野縁材を解体し[fig10] [fig11]、30mmほどの長さの部材にカットして畳が敷かれていた四畳半のスペースに敷き詰め[fig12]床にした[fig6]。それまで天井材だったものを床材に転用したのである。この転用が意味するものは、大げさにいえば、それまで天井だと認識していたものが床になるかもしれないというあり得たかもしれない可能性をこの部材に与えたということに他ならない。自分たちが都市に携わり、建築をつくっていく時に、何らか表現が必要であるとすれば、このあり得たかもしれない可能世界をどれだけ多く表現することができるかを僕は大切にしている。

[fig10]
〈渥美の床〉既存天井に貼られていた天井の野縁材。

[fig11]
〈渥美の床〉天井の野縁材を解体することで大きな天井高を確保する。

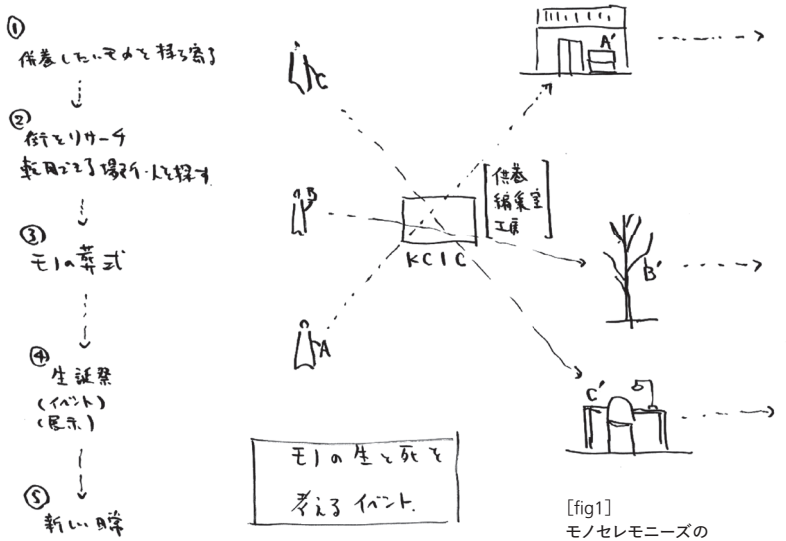
[fig12]
30mmの厚みで切断された野縁材を床に敷き詰める。

6 動き、流れる建築のかたち／モノセレモニーズ

大学での経験した都市へ向かう建築家の態度、伊勢神宮という建築の始原、なめらかな社会という全く新しい社会コンセプト、目の前の建物をこわすこと、釘抜きの形状、施主さんとの対話、知的経験も身体的経験も含めて、そのすべてが、動き、流れる建築のかたちという自分なりの建築の捉え方に寄与してくれた。何か順序立てて作戦を立てたわけではないし、先にどの知識や経験があったのか、その相互関係は確かにあるが、学ぶ順番を意識していたわけではない。とにかく、その動的な建築観に向かって、あらゆる知識や経験が、ほとんど自動的に統合されていったような感覚がある。このような実践が可能な環境というのは、あるいは、その実践の結果できあがった環境というのは、つまり浜松という都市は、僕にとって特別なものとして映る。ノスタルジアに浸ってはいないが、僕にとって明らかに浜松は特殊だ。モノセレモニーズの取り組みにおいて、僕はあくまでも建築家として少しの、しかし大切な縁をきっかけに鹿児島に招聘されたわけだが、僕は従来の静的な建築観に寄り添うのではなく、これまで培ってきた動的な建築観を鹿児島で転用してみようと考えた。もう少し踏み込んでいえば、その動的な建築を鹿児島にインストールすることで、どうすれば自分にとっての浜松のような特殊な場所をもうひとつ「狙って」つくることができるかというチャレンジでもあった。もし浜松のような場所を狙ってつくるようなプロジェクトができれば、住宅を一つ建てるのとは違う関係を僕が鹿児島と築けるはずだし、動的な建築によって一つのプロジェクトが持っている関係性の網を最大化することができれば、鹿児島の街に対して僕が与える影響も従来の建築設計とは違った広がりを見せるだろうという確信があった。そして、なにより、そのような都市と僕との関係は、大変豊かに思えた。

〈1〉 モノセレモニーズとは

モノセレモニーズとは、芸術に触れたい人、思い入れがあるモノ、改善の余地のある開かれた場所という三つの要素を同時期に公募し、それらを結びつけ、読み替えとリデザインによってそれらをマッチングさせ、プロジェクトとして立ち上げて、一定期間芸術祭として市民に開放するという複合的な参加型プロジェクトである。[fig1]



[fig1]
モノセレモニーズの
初期コンセプトスケッチ

例えば、【A】モノ｜捨てられない幼稚園の遊具
【B】人｜公募で参加したアートに興味がある鹿児島大学の学生さん
【C】場所の悩み｜ホテルのフロントにチラシ用の棚がほしい
を結びつけて、【B】さんが、【A】を【C】に転用するためのリデザインを設計[fig2]・施工[fig3]・設置[fig4]するというものだ。
[A]を解体する前は供養祭[fig5・6]を、【C】に納品する際は誕生祭[fig7]を行い、それを市民に芸術祭として公開するという流れを持つ、複合的な「セレモニー」ともいえる。
祭の仕組みを積極的に取り入れるというのは式年遷宮から学んだことだ。

[fig2]
設計はまずモノの測量から始まる。解体が先に行なわれることもあった。

[fig3]
施工風景。施工補助として宮園孝都さんに協力いただいた。

[fig4]
ホテルニューニシノへの〈街の報せ〉設置風景。

[fig5]
供養祭では地元小学生“あいおちゃん”が踊り子を勤めてくれた。

[fig6]
モノは供養され、解体の準備を待つ。

[fig7]
レトロフトへの〈ハモンドの踊る靴〉納品時に開催された「誕生祭」。

[fig8]
左から、〈ライフ・イズ・ビューティフル 1〉〈ハモンドの踊る靴〉
〈かがみん〉〈インサイドメモリー〉〈街の報せ〉
〈スタンドアップスタンド〉〈ライフ・イズ・ビューティフル 2〉

一つ一つのイベントの流れを積極的に形式化することで、このワークショップ自体の他の場所での実施可能性と、歴史的な文脈を引き入れようと試みた。結果的に、成果として6つのプロジェクト[fig8] [モノセレモニーズ DATA：p49-70]が「納品」された。つまり僕にとっては「建築」のプロジェクトが一気に6つ立ち上がったのだ。このようなプロジェクトの枠組は、マテリアルの流動、渦としてのプロジェクト、こわすことから学ぶ、想像力を二つもつ、パラレルワールドを生きる意識という浜松での実践から得られたキーワードをきっかけにして生まれている。

〈2〉モノの生と死

「モノ」の生と死を扱うというコンセプトは、協働した会田大也さんに拠るところが大きい。会田さんは初回の打ち合せの際に、集落の閉じ方の話をしてくれた。ダムに沈んだ集落がどのようにその終わり方を迎えるかという時に、例えば集落の神社をダム上に引っ越したり、桑を置くという儀式を行ったりという話を聞いて、モノや場所に宿った命がどのように流転を実現していくかというアイデアを貰ったのである。会田さんも直感的にこのテーマに賛同してくれてプロジェクトの推進力となったのだが、大きな話をすれば、僕たちは今、日本社会が、経済的にも人口動態としても成熟していく只中に直面していて、モノや場所や、お金が、余り始めているという前提の共有がまずあった。例えば、僕の実家は、両親が新築した郊外の5LDKなのだが、今は三人兄弟全員実家を出て、三つの部屋が物置になっているし、以前二世帯で住んでいた祖父母の実家も、祖母が亡くなり、祖父が施設に入所したため、一軒丸ごと空家状態で大量のものと部屋がそのまま残っている。平均寿命が伸びているとはいえ、急速な高齢化が進んでいるということは、お葬式の数が増えるということであり、モノが余るということは、モノを捨てる機会が増えるということであり、場所が余るということは、建物の取り壊しが増えるということである。僕たちが生きるこの成熟社会では、あらゆるものが余り始めることは明白だ。それは新たにものを生み出すことの機会が相対的には減ることを意味し（資本主義の推進にはモノを生み出し続けなければならないというジレンマはあるが）、ゼロから新しいモノや場所を生み出したり、あるいは単に終わらせるだけではなく、「今既に生まれているもの」を前提として、その価値を、

それまでとは違う環境にスライドさせ、同時に新しい命を吹き込むことがこれからの創造性の需要として求められるだろうという確信が、僕と会田さんにはあったのである。

あるいは、モノや場所に生と死を関連づけさせる、極端に言えば「人」のように命あるものとして扱うこうした倫理観は、上記したような現在にある正しい需要からだけではなくて、一世紀前を生きた西田幾多郎という哲学者によっても予言されている。

“我々が物を知るということは、自己が物と一致するというにすぎない。花を見た時は即ち自己が花となって居るのである。”※1

「主客同一」、「絶対矛盾的自己統一性」という謎めいた言葉を残した西田は、ある矛盾する事柄は突き詰めて考えれば実は同じことなんだよと僕に教えてくれた。私とは何か、他者とは何かという哲学的な問いを続ける中で、真実在とはその私や他者が分つ前に其処にただ在る状態で、彼はそれを純粋経験と呼んだと僕は理解している。この純粋経験とは例えばサッカー選手が信じられないほど美しいプレーをした後に「身体が勝手に動いた」と言うような類いの、我を忘れた「ゾーン」の状態を想像してもらえればよい。もはやそのプレーヤー自身がサッカーそのものであるかのようなプレー（例えばオランダの伝説的プレーヤー、デニス・ヴェルカンプが1998年のフランスワールドカップの準々決勝対アルゼンチン戦で見せた、走りながら後ろから来るボールを柔らかいトラップで脚元に置き、アウトフロントキックでシュートにまで至る一連の動作が思いつく）を純粋経験の状態、つまり真実在として、その地点から私たちの思考を眺めれば、主客も私も他者も隔てがなく、私だと思っていたものがあなたであり得るし、花と思っていたものが私であり得る、その逆もまた然りというわけである。私とは花、花とは私であり、人とモノの境は「そもそも」ないのだということを西田は教えてくれた。だからモノを主体に動きを考える、という今回のプロジェクトは、主語がモノであってよく、動いたり、生まれたり、死したりする。モノセレモニーズは、動詞として行為する主役に、人以外を据えるプロジェクトとしても理解されたい。

※1　岩波書店『西田幾多郎全集 一巻』西田幾多郎 p76

〈3〉浜松で学んだことの「転用」

その前提の下、まず考えたのは、マテリアルを動かして創作を行なう枠組みをつくるということだ。何かをつくるというワークショップというよりも何かをどこかからどこかへ動かすという感覚を参加者の方に持ってほしかった。要するに、一つのプロジェクトの中で、動かす中継地点に創作行為があり、403が天井を床に転用したようなことを参加者も体験できるワークショップという枠組を用意したのである。前の場所から次の場所へ動く際の「調整」をデザインする、その創作行為を成立させるためには、中継地点の前後への想像力を同時に駆使する必要があり、想像力を働かせるためにはそのトリガーとなるための情報をなるべく多く持っておくことが肝要だ。創作の実作業の中では、まず解体からスタートする。大切なモノを預かり、丁寧に解体することでその仕組みを理解し、その上で次の場所に持っていくための調整の設計を参加者は行なう。このプロセスは、〈三展の格子〉のように、まずつくりたいものが先にあって図面を引く作業とは真逆のプロセスであり、今ある資材を前提とした設計行為という意味で通常の設計デザインよりも条件が厳しいといえるかもしれない。具体的なカリキュラムとしてはまず、自分たちが浜松で活動しているのと同じく、実際に「クライアント」のような存在を設定することにした。モノや場所、人を公募しそれらを結びつけるプロジェクトと説明したが、場所を提供してくれる人もその場所をどうにかしてほしい「クライアント」であり、モノを提供してくれた人もそのモノをどうにかしてほしい「クライアント」である。参加者は一つのプロジェクトで「クライアント」を二人相手にすることになるのである。そのクライアントは公募で集めることにして、顔が見える存在として参加してもらうことになった。結果的に、参加者は12名[モノセレモニーズ DATA：p55-56]、モノの提供は14個[モノセレモニーズ DATA：p51-52]、場所の提供は6カ所[モノセレモニーズ DATA：p53-54]、と、合計30余りの固有の要素によってプロジェクト全体が立ち上がることとなり、そのそれぞれがモノセレモニーズを通して新たな関係を結ぶことになったのである。しかし、僕の経験としては一人のクライアントだけでも難しいのに、二人を同時に相手にするのはさらに至難の作業だ。そのベストな組み合わせを考えるべく、まず参加者は全てのモノと場所の情報をインプットしなければならない。まず集まったモノ自体について、どこでどのように誰にどの程度の期間使われてきたのかを知る必要があり、そのためにモノの持ち主にヒアリングをする。且つ、その行き先の候補にはどのような場所があるのか、その場所についてもよくよく理解しないといけないので、場所の運営者にもヒアリングをする。その上で組み合わせを考える。つまり、モノの成り立ちと受け入れられる場所に対して、想像力を二つ同時に働かせる必要があるのだ。参加者は、最適な組み合わせを自身が考え、このモノとこの場所をこのように結びつけたらいいんじゃないかという発想を基点にして、設計作業と解体・施工が一体となって進んでいくのである。このようにして、参加者の想像力が、集まった要素が持つあらゆる関係性の方向に飛び出し、モノセレモニーズ自体がいくつもの関係性をかき回す渦となり、その渦から派生した6つのプロジェクトもまた、モノや場所を新たにつなぐ渦として、その役割を担ったといえる。

〈4〉鹿児島から学んだこと

僕にとっての鹿児島はこのプロジェクトを通して、結果的に、浜松の街に対する感覚に近い都市になった。自分のフィールドとして都市が存在し、そこに例えばプロジェクトの種がいくつもあるというような感覚である。実際、今回のプロジェクトを通して、複数の場所から違う悩みの相談を持ちかけられたり、参加者の人達が浜松に来てくれたり、少なくとも住宅を一つ設計するだけでは、レクチャーを一度行なうだけでは得難い関係性の数と力強さを僕は鹿児島に持つことができたのである。ここまで説明してきたような動的な建築観の実践の中で、関係性の網を意識すると、こうした渦の実現や、参加者がモノと場所を結びつける新たな形を思いつくまでに至るプロセスが、無限の可能性の中からたまたま一つ実現した偶発的な状況であるということを実感できる。この実感は、関係を認識する上で非常に重要だ。このような偶発性をプロジェクトに積極的に取り込めたのは、自分でなるべく決めないということを実践し続けた結果である。何故僕が決めないか、その理由は『なめらかな社会とその敵』でも言及されている“たしかなものなど何もないという感覚”に求めることができる。自分で何かを決めても、社会は何も確かではなく、その決定は簡単に覆ることを僕は身体で理解している。例えば浜松で独立するこ

とや、動的な建築観を築いたこと、鹿児島でモノセレモニーズという複合イベントを運営することになった（当初の依頼は下見、打ち合せを含め一週間程度のワークショップだった。）こと、その成果物として6つのプロジェクトが納品されたことは、自分を含めた周りの状況からほとんど自動的に導き出された判断で、自分で決めたという感覚はほとんどない。自分の判断よりも、他者の有り様よりも、西田のいう“純粋経験”を信じているのだ。その結果として、幾つもの渦とそのタイミングでその場所でしか生まれ得ない縁が、それこそ渦のような人知を超えた偶発性で、実現したのである。やりたいことを実現させることに固執すると、それ以外の可能性を縮小させてしまう。しかし、かといって、構築への意思を諦めているわけでは決してない。やりたいことの外側にある、自分の脳より面白いことを引き受ける柔軟さと、それをもう一度自分なりの基準に引き上げる構築への意思の両方が、こうした渦の実現に必要なのだ。要するに縁を大事にするというのは、感情的で、刹那的なものではなくて、あくまでも建築や創作への態度として冷静に対象化する方が全うなんじゃないかということだ。こういう出会いがなかったら今に至っていない、奇跡的でドラマティックだね、みたいなことではなくて、自分の範疇から生まれた計画に対して批判的であり、他者への信頼を持つなら、結果的にどう転んでも縁が実現されているに過ぎない。これは縁や、つながり、絆といったヒューマニスティックな消費を避けるための、現代における創作態度の話である。

プロジェクトという言葉を僕はよく使う。403の活動においても、作品ではなく、プロジェクトという言葉で説明するのだが、作品というと、確固たる作家がいて、完成を迎えるという、完結したイメージがあり、その解釈や作品という創作行為は作家の中で閉じられている印象を受けるが、プロジェクトというと、複数人で行なったり、始まりや終わりが明確でなかったり、その目的やプロジェクトへの関わり方もまた参加する人によってそれぞれでいいし、そのプロジェクトのアウトプットは建築でもアートイベントでも本でも、何でもいいというような広がりを感じるからである。そういう意味で、鹿児島でのモノセレモニーズは紛れもなくプロジェクトであった。自分が都市に対して何かを行為する時に、プロジェクトという道具はとても有効に働く。建築のプロジェクトか、アートのプロジェクトかはほとんど関係がないように思える。実際に僕が主導したのはモノの転用のデザインだし、結果的には建築物の提案にはなっていない。あくまでも僕にとっての建築観をプロジェクトに投影した成果である。アウトプットの種類は重要ではなく、どのくらい丁寧に多くの要素と関わることができ、それらを動かす渦をつくることができたのかこそが、僕にとっての浜松のような都市との関係をつくることにつながっていると思う。その意味で、この一連の取り組みは、分野にとらわれず開かれたものであると考えている。このモノセレモニーズと、このテキストの執筆を通して、僕は根本的には、この渦のようなプロジェクトのつくり方、そうして生まれた渦がその中心にいる人間やその周りの環境に対してどのような影響や変化を与え得るか、それがこれからの社会にどのような影響を与えるか、さらにその変化によって建築や私たちが何を学ぶかを考えたいのだと気づいた。要するに、人間と都市の関係というものについて、考えてみたいのである。自分は建築の文脈を背負った建築家として認識されているが、その前に一人の人間である。あくまでも建築が思考の土台になるし、私にとってのツールは概念的にも物理的にも建築だ。それを携えて、鹿児島のような都市がもうひとつ増えたら、あるいは浜松のような場所が誰かにとっても増えたなら、そういうパラレルワールドを想起するチャンスを一つでも多く生むことができれば、僕たちの住む世界は今よりもっと多くの価値や考え方を許容できると信じている。このモノセレモニーズは、モノを媒介にした、人と都市の関係の記述として広く知られてほしい。その記述された総体を僕は、「動き、流れる建築のかたち」として表現したのである。

モノセレモニーズ DATA

実施期間　（会期は既に終了しています。）

2016年9月22日	事前説明会
2016年10月4日−20日	人・モノ・場所の公募
2016年11月23日−27日	場所のヒアリング
2016年11月27−12月20日	モノセレモニーズ展示
2017年3月6日−3月28日	コンセプトドローイング展示

カリキュラム

1. 生まれ変わるモノ、生まれ変わらせる人、そして場所の悩みを募集する。
2. モノのこれまでを振り返り、大切なことをピックアップする。
3. モノの次の生き方を考え、次にモノが置かれる場所に合わせて、改修案を考える。
4. 改修案を元に作業し、人の手によって、モノを生まれ変わらせる。
5. 生まれ変わったモノを新しい場所に置き、モノが新しい生活を始めていく。

募集した人・モノ・場所の条件

■モノの募集
捨てたいとは思っているけれど、捨てられない思い出のモノ。
例えば）捨てられない嫁入り箪笥 など
・モノの名前
・モノへの思い出
・モノの写真

※モノの素材は、以下の条件に合うのもをお願いします。
・分解・加工が容易な素材であること
・電化製品でないこと
・容易に自然腐食しないもの
・耐久性があるものが望ましい。

■ヒトの募集
辻、会田両氏とともに、リデザインに挑戦してみたいヒト。完成した成果物の出展者として、
展示物のキャプションに記載されます。
期間　2016年11月23日−27日

■場所の募集
現状、悩みを持っている場所。
例えば）昔からある古いオルガンを動かしやすくするためのコロ付きの台座が欲しい など
・場所名
・場所の悩み
・場所の写真

モノセレモニーズ概要

■会　期
2016年11月27−12月20日
■会　場
1 かごしま文化情報センター（住所 鹿児島市易居町1-2／時間 10:00〜18:00／定休 水・日曜日）
2 ふじが丘保育園（会期中は、かごしま文化情報センターにて展示）
3 レトロフト（住所 鹿児島市名山町2-1／時間 11:00〜19:00／定休 月曜日）
4 ホテルニューニシノ（住所 鹿児島市千日町13-24／時間 8:00〜22:00／年中無休）
5 KENTA STORE（住所 鹿児島市東千石町10-12／時間 11:00〜19:00／定休 木曜日）
6 凡（住所 鹿児島市東千石町1-15／時間 12:00〜25:00／不定休）
■入場料：無料
■主　催：文化薫る地域の魅力づくり実行委員会、鹿児島市
■助　成：一般財団法人地域創造
■企　画：かごしま文化情報センター（KCIC）アートディビジョン

■参加市民アーティスト
北野 真衣・穂満 亮祐・飯泉 綾子・入田 裕夏子・大山 佳菜

■セレモニーコーディネーター
辻 琢磨（建築家 ／403architecture [dajiba]）
会田 大也（ミュージアムエデュケーター）

■KCICアートマネジメントラボ2016とは
「KCICアートマネジメントラボ 2016」は、かごしま文化情報センター（KCIC）が開講するレクチャーシリーズ。芸術・文化と社会のつながりを考え、社会の持つ創造力の向上を支援するアートマネジメント。全体テーマを「○○×アート」とし、社会を構成する多くのテーマの中から6つ（スポーツ、観光、企業、建築、防災、政策）を選び、芸術・文化と掛け合わせて、地方都市・鹿児島におけるアートマネジメントを模索します。様々な分野で活躍するゲストと思考を深め、創造力を高めたいと思います。
http://www.kcic.jp/news/15348

[集まったモノ]

マージャン牌

1973 年に天文館にオープンした「ホテルニューニシノ」の前身にあたる「西野旅館」（大正創業）の時代から受け継がれてきたマージャン牌。その思い出を、ホテルニューニシノの 5 代目現社長である N さんが語ってくれました。「宿泊客に貸し出されていたものでもありますが、2 代目社長だったおじいちゃんが友人達とマージャンを楽しんでいた姿を、今でも思い出します。私はいまだにマージャンのルールも知らないんだけどね。」

すごく重い棚

現在はレトロフトとなっている建物が建築されたのは 1966 年。当時は靴の問屋でした。おそらくその時代から存在していた棚。重たいためにずっと建物の奥に眠っていたそうです。建物はその後、カメラ屋さんがテナントとして入ったり、空き家の時代を経たりして、2011 年から現在のレトロフトの形態で運営がスタートしています。棚には大小のキズや、コップの濡れ跡などが刻み込まれていて、経てきた時間の長さが偲ばれます。

製図板

提供してくれた I さんが、鹿児島大学建築学部に入学したときに生協で購入した製図板です。T 型定規と呼ばれる製図用の定規と組み合わせて使用します。多くの学生が入学と同時にこの製図板を手にし、課題に答えるため様々な構想を描き出しますが、I さんも同様に学生時代の多くの時間をこの製図板と過ごしてきました。現在では使用することも無くなりましたが、それでも愛でることができず、卒業から 6 年間、押し入れに保管していました。

ちゃぶ台

これは、I さんが大学受験に合格し、初めての一人暮らしを始めるにあたって購入したちゃぶ台です。10 年間、3 回の引っ越しを経ても、ずっと使い続けたちゃぶ台なので、多くの思い出が詰まっているそうです。「学生時代の課題設計も、社会人になってからの資格試験の勉強も、沢山作ったプラモデルもこの上でこなしてきました。昔いたガールフレンドが作ってくれた手料理も、この上で食べました。」

中華料理屋円卓

林光華園の旧店舗の 2F の宴会場で使われていた中華テーブルです。2F は和風か中華風か分からない雰囲気で、店主の息子さんがイベント好きのため、KCIC のスタッフも打ち上げでよく使っていたそうです。ビルが建て替えられるということで破棄されていたところを拾われました。

鏡台

提供者である T さんの、お婆さまの鏡。指宿で今も営まれている旅館の先代の女将であるお婆さまが大切に使われてきましたが、ここ 10 数年は倉庫に保管されていたとのこと。引き出しつきの化粧台と、シンプルな鏡だけの姿見がありますが、どちらも鏡の角度を 360 度回転させることができます。鏡に残ったシールやテープの跡が指宿で過ごしたその年月を物語っています。

木製大型ブロック

ふじヶ丘保育園で長らく園児に使われていた木製の遊具。シンプルな形を積み上げて、秘密基地やテーブルセットが日々子どもたちによってつくられていました。子どもが怪我をしないように角がゴム製のキャップで養生されているので子どもでも安心して使うことができます。

良い積み木

M さんのお世話になった前職の社長からいただきものの積み木で、日本製で質が高く定価は 12,000 円。自分の子どものおもちゃとして愛用していましたが、子どもの成長とともに使われなくなったものの、モノ自体の素材感や質感に愛着があるので、それを活かして生まれ変わってほしいという願いを受け取っています。単純な幾何学と木のぬくもりが合わさり、誰にとっても懐かしい、ザ・積み木のようなオーラを纏っています。

カタカタ

S さんが実家に暮らしていた時期に、生まれたばかりのお嬢さんへ友人からプレゼントされたカタカタ。木素材の素朴さがお気に入り。お嬢さんが家の屋間をこれで音を鳴らしながら移動する姿はとても可愛く、愛おしい平和な時間が思い出されるそうです。そんなお嬢さんは 今年で 18 歳、県外の大学を目指す受験生です。「娘が地元からいなくなった時に、このカタカタが街のどこかで生まれ変わってくれたら嬉しいです。」

テニスラケット

Y さんが、テニスをする女性に憧れていた小学校 4 年生の時期、初めてテニスクラブに通い始め、憧れのラケットを買ってもらうことになりました。高見馬場にあった「中央スポーツ」にて、沢山並んでいるラケットを前に圧倒された Y さんは、長い時間悩んだ結果ホワイトにピンクのラインが入ったこのラケットを選んだそうです。「私はいまはもうテニスはしていませんが、悩んでいる私を待つ間の親の表情を今でも思い出します。」

ベビーベッド

Y さんの姪っ子が使っていたベビーベッド。Y さんの姉に当たる姪のお母さんは、白いベッドが好きで、乙女感を子ども部屋に演出したかったそうです。姪っ子が大きくなった今は使われていませんでした。

おままごと用台所

Y さんの姪っ子が大人の仲間入りを目的として使用していた、おままごと用の台所です。カラフルなパーツ等に分解可能で、蛇口や引き出し、コンロの取っ手、壁掛け収納までリアルに、且つなじみ深く再現されています。

木の椅子

ふじヶ丘保育園で長らく園児に使われていた木製の家具。卒園会などの行事や毎日のお昼ご飯で活躍しました。子どもが親しみやすいように、水色と黄色の差し色が今もそのかわいらしさを引き立て、園児と一緒にこの椅子が集まることでよりにぎやかな場所が生まれるのです。

箱椅子

ふじヶ丘保育園で長らく園児に使われていた木製の家具。シンプルな形状のため、使い方に応じて置き方を変えることでその座面の高さを変えられます。

[モノを受け入れる場所]

鹿児島市街地 MAP

1 かごしま文化情報センター（KCIC）

鹿児島市易居町1-2（10:00〜18:00 定休：水・日曜日）

KCIC アートマネジメントラボ事業の一環で開催されているモノセレモニーズ。モノ、人、場所の組み合わせはそれぞれの場所で展示されますが、惜しくも今回はマッチングに参加できなかったモノも含め、KCIC でその全体概要を展示しています。展示に際して、キャプションを掲示する為の什器が必要となり、今後の利用可能性も考慮してその什器が新たに生まれ変わります。

2 ふじヶ丘保育園（緑ヶ丘）

2003 年に建て替えられたふじヶ丘保育園は、焼き芋、自然体験など、体験活動を軸とした自由を重んずる教育が特徴です。園内にはミドリガメ、ウサギの小屋があり、教室は一年ごとに間取りを変えられるフレキシブルな空間となっています。棚や椅子を動かして部屋割りを変えていますが、折りたたみ式の机だけは一カ所に集めて動かしづらい存在のため、その机をいつでも動かせる収納棚をつくることになりました。

3 レトロフト

鹿児島市名山町2-1（11:00〜19:00 定休：月曜日）

2012 年にオープンしたレトロフト。この建物は、1966 年竣工、築 50 年の鉄筋コンクリート造の建物です。オーナーである永井夫妻は、この建物の再生を通して、空洞化していた名山町エリア全体に文化の風を持ち込み、老朽化した建物の「リノベーション」の先駆けとなりました。今回のレトロフトの悩みは、地下のコモンスペースに鎮座するハモンドオルガン。このオルガンのために楽団ができたほどの名物オルガンですが、重くて動かしづらく、様々なイベントが行われるこのスペースに対応できるような新たな「土台」を求められました。

6 凡

鹿児島市東千石町1-15（12:00〜25:00 不定休）

老若男女、ロックミュージックが好きな人も好きでない人も、とにかくいろんな人が集まる凡は、定期的にライブや DJ イベントが催されています。その空間の許容力はオーナーの中園さんによってもたらされていて、中園さんは、10 年ほど前、知人のカラオケ教室の先生の推薦で借りた 5 冊の本がきっかけで読書に目覚め、壁際の蔵書がみるみる増えるほどです。今回はその増え過ぎた本を許容する新しい本棚を求められました。

5 KENTA STORE

鹿児島市東千石町10-12（11:00〜19:00 定休：木曜）

甑島を拠点に豆腐屋さんを営む山下商店の姉妹店である KENTA STORE は、今年オープンしたばかりの、鹿児島の人と街をつなぐ食と暮らしの専門店です。オーナーの山下さんは、農家と豆腐の製造者として誰に届くかがみえる、ショールーム、ショーケースの場所を目指しています。そんなお店のコンセプトを、天文館にぎわい通りを歩く人からもさりげなく自然に分かってほしい、そんな思いを実現させる看板が求められました。

4 ホテル ニューニシノ

鹿児島市千日町13-24（8:00〜22:00 年中無休）

大正初期に創業し、100年を超える歴史を持つ老舗旅館のホテルニューニシノは、1973年に現在の姿に建て替えられ、フィンランド式サウナを持つ天文館のホテルとして市民に親しまれています。4Fのロビーは大きな窓が特徴的ですが、エレベーター手前に受付カウンターがあるため、お客様を奥のソファスペースに引き込み、ロビーの利用者を増やしたいという意向がありました。

[つくった人]

辻 琢磨
建築家

1986 年浜松市生まれ。横浜国立大学大学院 Y-GSA 修了後、2011 年より 403architecture [dajiba] を学部同級生の橋本健史、彌田徹と共同主宰している。モノセレモニーズには、KCIC スタッフの市村良平さんとの縁がきっかけで参加することになった。自分のこれまでの建築活動と鹿児島のまちが結びついて、創造性が爆発した。

撮影:長谷川健太

会田 大也
ミュージアムエデュケーター

1976 年東京生まれ。情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 修了後、2003 年開館の山口情報芸術センター [YCAM] に、エデュケーターとして 11 年間勤務。2014 年より東京大学大学院 GCL 特任助教。昨年度に引き続き KCIC のプロジェクトに参画して、「モノの流転を見届ける」ことが自分の性に合っていると感じる。

飯泉 綾子
会社員

京都伝統工芸専門学校卒業後、掛け軸専門の修復師として働いていたが、現在は鹿児島で医療業務に従事している。画家である友人の紹介が縁でモノセレモニーズに参加した。昔から「人」と「もの」の思い出を紡ぐことを大切に考えているが、今回、思いを具体的な形として表現ができたことがとても嬉しい。今後は記憶や思い出を主題としたアーティストとして活動を行っていきたい。

入田 裕夏子
学生

1995 年鹿児島市生まれ。鹿児島大学法文学部人文学科メディアと現代文化コース在籍。モノセレモニーズには、美学・メディア論を専門とする、鹿児島大学の太田純貴准教授の紹介で参加することになった。今回ワークショップに参加したことで、使わなくなったモノも形を変えて生まれ変わることができるのだと感じることが出来た。

大山 佳菜
学生

1995 年鹿児島市生まれ。鹿児島大学法文学部人文学科メディアと現代文化コース在籍。モノセレモニーズには、美学・メディア論を専門とする、鹿児島大学の太田純貴准教授の紹介で参加することになった。ワークショップに参加したことで、モノや場所に込められた物語や人の思いについて考えるようになった。

北野 真衣
学生

1996 年鹿児島生まれ。鹿児島県立松陽高等学校卒業後、鹿児島大学教育学部美術専修に在籍。以前から建築に関心があったため、このワークショップに参加。大学では主にグラフィックデザインについて日々勉強中。好きな言葉は「のんびりいこうよ、人生は」by ドラえもん

穂満 亮祐
学生

1994 年鹿児島県日置市出身。鹿児島大学工学部建築学科を卒業後、同大学院へ進学し建築について学んでいる。KCIC アートマネジメントラボには 2015 年に引き続き 2016 年も参加。今回のワークショップでは単にモノを作るだけでなくモノや場所について理解し、物語を紡いでいくことに魅力を感じている。

市村 良平
KCICスタッフ

1986 年島根県生まれ。鹿児島大学大学院建築学専攻修了後、商業施設・マルヤガーデンズのコミュニティスペースの運営に従事。2014 年より地域づくりの現場で活動を始める。2015 年より KCIC に合流。鑑賞者と作品の関係を考える会田大也さんと、地域にある素材に着目して建築に取り組む辻琢磨さんが協働して企画を考えると面白くなるだろうと思い、二人に声を掛けた。

応援団員W

鹿児島生まれ。紆余曲折後、Uリターン。古い木箱のガムテープの粘つきを削るために、生まれて初めてサンダーを手にした。木肌と共に、モノの記憶もまろやかにやさしくなって、新しい場で新しい記憶を上書きしていくだろう。快い人と人のつながりの小さな点になれて幸せだった。

江口 美久
ウエディングプランナー

鹿児島生まれ。ウエディングの世界で約 9 年間、結婚式をつくる。「創る」という事を違う角度から観ると今までに見えなかったコトが見えるかもしれない。という思いで、モノセレモニーズに参加。

森永 涼平
学生

1993 年山口県美東町生まれ。鹿児島大学卒業後、同大学大学院に進学。モノセレモニーズでは、ひょんなことから市村さんと出会い、参加することになり、不思議な運命を感じている。

宮園 孝都
自営業

1983 年鹿児島県大崎町生まれ。小さな工務店を経営。KCIC スタッフの市村良平さんに誘いをうけて技術サポート担当としてモノセレモニーズに参加。参加者が思ったより工具を上手く使えることに驚きながら参加者のサポートをしている。

1 ハモンドの踊る靴

レトロフトの地下室に鎮座するハモンドオルガンを簡単に移動させるための台座の計画です。ハモンドオルガンは、高価なパイプオルガンの代わりにゴスペルミュージックを生み出し、その後のジャズミュージックに影響を与えたと言われています。
もともと靴の問屋が入居していたレトロフトの倉庫に長らく置かれていた、靴箱と思しきすごく重い棚の側板が台座の床面としてオルガンの脚を受け、林光華園の旧店舗で使われていた中華テーブルを台座の側面に転用してます。オルガンの脚元と台座の突起の組み合わせは脚鍵盤を模し、中華テーブルの裏側のダークブラウンの表面は、このハモンドオルガンの色との調和を図っています。台座の分だけ演奏位置が高くなったため、ジャズのスタンディング演奏にも適した高さに生まれ変わっています。靴という人の脚元を支えた棚の素材が、オルガンの脚元を支え、人を集める円卓の曲線を利用することで、新しい「靴」を履いたオルガンに再び多くの人々が集まるようにという思いを込めました。
（辻 琢磨／会田大也）

モノ：すごく重い棚／中華料理屋円卓

場所：レトロフト

人：辻 琢磨／会田 大也

「靴」の内側には、もともと赤色だった中華テーブルのオモテ面を配し、指し色として用いている。オルガンの荷重を支える底板には、もともと靴箱だった重く丈夫な棚の最も腐食の少ない部分を切り出し、ボール式の自在キャスターを新規で取り付けている。

2 かがみん

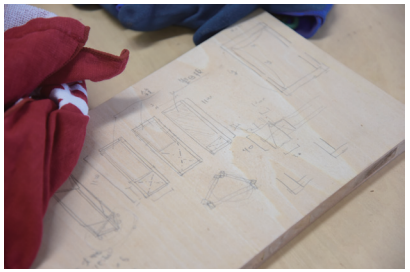
KENTA STOREは甑島から発信された、人とモノと場所を繋ぐ、鹿児島の食と暮らしの専門店です。素敵なお店ですが、一見さんが少し入りにくい、何のお店なのかわかりづらいというオーナーの山下さんのお話を受けて、このような三面で構成された看板を制作しました。素材として用いているのは、旅館のお婆さんが大切にしてきた姿見と鏡台の鏡、そして建築学生が使っていた製図板。その二面の鏡が映し出すのは、KENTA STOREのある天文館のアーケードとお店の中、「ちょっと覗いてみよう」と思わせるようなデザインを目指しました。そして三面目は、KENTA STOREの方々がお店から伝えたいことを毎日自由に書いていただけるように、多くのデザインが生まれてきた製図板を転用し黒板としています。天文館という街に溶け込みつつ、きらびやかな看板が列ぶアーケードで華美な装飾を避け、「シンプルに目に留まる」ことを意識しました。お店とお客様とのコミュニケーションのツールとなることを願っています。

（入田 裕夏子／大山 佳菜）

モノ：鏡台／製図板／ちゃぶ台

場所：KENTA STORE

人：大山 佳菜／入田 裕夏子



2枚の鏡は、鏡台の枠を外して材を確保、黒板に使う製図板は平面が鏡と合わせ直角三角形となるよう寸法を調整し、それぞれで蝶番を用いて接続している。枠はホワイトウッドを新規で用い、接合はビス留めとした。

3 ライフ・イズ・ビューティフル

凡は、自由を愛する人たちの憩いのバーです。飲み屋なのに、ただ寝に来るだけの人がいたり、開店時間はまちまちであったり(Facebookで毎日お知らせ)、店もお客さんも自由に過ごしています。そんなお店には不思議な本棚があります。哲学だったり宗教だったり、果ては女性の下着の歴史の本まで!置いてあります。まるで子どもの知りたい心と同じような、無邪気な知的欲求を満たす書籍たちと言えます。この場所に、ふじヶ丘保育園で子どもたちが使ってきた椅子を転用した本棚を製作しました。素材の木の板には、保育園の歴史(サイン)がそっと記されています。大人たちが、いつでも子どもに還ってきても良いように…そんな想いも込めて、このサインを残してあります。
本棚の色は、店舗の内装のイタリア風の色彩にも合っていると思っています。イタリア映画『ライフ・イズ・ビューティフル』(1997)に登場する素敵な本屋さんの雰囲気を思い出しながら製作しました。　(飯泉 綾子)

モノ:木の椅子／箱椅子

場所:凡

人:飯泉 綾子

もともと幼稚園の椅子として長らく使われた椅子の座面の裏側には、この椅子が使われていた時の署名があった。その署名が本棚の背板の正面にくるように設計し、利用者が本を手に取った際その裏に署名を見つけ、幼稚園の記憶が蘇るように意図されている。

4 街の報せ

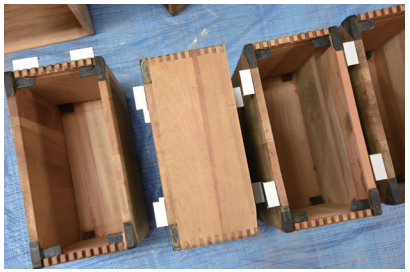
今回制作したのはホテルニューニシノの受付カウンター横に置かれている観光や飲食、イベント、地図といった内容のチラシやパンフレット類を置くための収納棚です。モノにはふじヶ丘保育園で長く使われてきた木製大型ブロックを選びました。ブロックを開いてみると、約20年間子どもたちに使われて傷がついたり色が変化したりした外側とは異なる美しい木の面が現れ、この内側にチラシ類を入れて収納として使うことで用途の転換を図っています。これまで使われてきたことによる味のある外面と全く触れられることのなかった無垢な内面の質のギャップに加え、子どもたちの「遊び」という長期的な歴史と短期的に更新を繰り返すフレッシュな「報せ」が対を成して共存していきます。収納は壁にある既存のバーにフック状の金具を用いて取り外しできるように固定し、時期によって変化する報せの量に可変的に対応できるようにしています。これまで机の上に密集していたチラシやパンフレット類を、ホテルのお客様方が思わず目に入り手に取ってしまうように、壁を広く用いて配置しました。

（穂満 亮祐）

モノ：木製大型ブロック

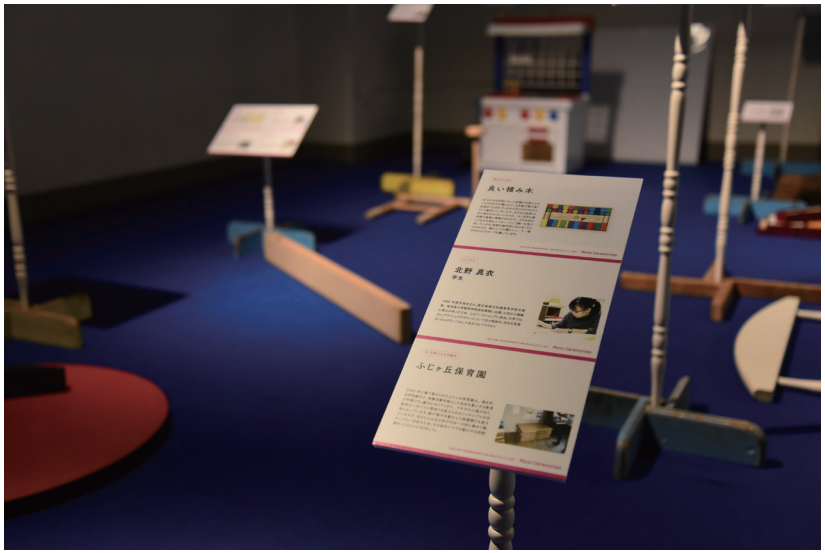
場所：ニューニシノ

人：穂満 亮祐



もともとの箱形の積み木の角は、互い違いに切り込みが入っている非常に丁寧な設計で、その接合部のギザギザを残しながら箱の蓋を外すことで、ホテルエントランスの棚となった時の装飾として機能するよう設計された。

5 スタンドアップスタンド



鹿児島市の「文化薫る地域の魅力づくりプラン」を推進する活動拠点として設置されたKCIC。しかし、展示やイベントなどで使用される什器はどんなシチュエーションでも使用できる中庸なデザインのもので、どことなく無機質で冷たい印象があるのも事実です。普段使っている金属製のキャプションスタンドも、「文化薫る」とは言い難いものでありました。そこで今回、KCICが使うに相応しい什器として「キャプションスタンド」を、製作しました。

材料にはベビーベッドの手すりの支柱と、保育園の子ども用椅子の背もたれを転用しています。装飾的な支柱に、色付けされた背もたれを適度な大きさにカットして土台としました。大中小の3種類の高さを揃えたことで、これまで欲しいと思っていた子どもの目線にあった高さのスタンドも誕生しました。

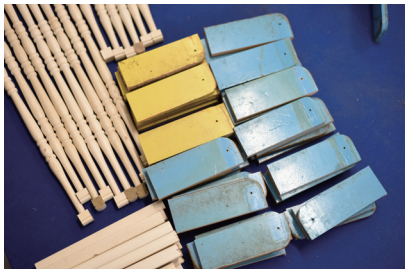
赤ちゃんが生まれ、子どもが成長して「立ちあがる」ように、鹿児島の文化が流転・生成していくようなプロジェクトがたくさん「立ちあがる」ことを願っています。

（市村 良平）

モノ：ベビーベッド／木の椅子

場所：KCIC

人：市村 良平



同一規格が反復するベビーベッドの手すり子を上部横材とともに切り出し、キューブ上になった横材を芯にして幼稚園の椅子の座面を風車のように4枚取り付けることでキャプション台の構造を安定させる脚としている。

6 インサイドメモリー

真新しい外見の中には長年子どもたちに愛されたモノが詰まっています。どのモノも長年愛用されていたらしく所々汚れていたり、塗装が剥げていたりしています。この収納棚はSさんのお嬢さんが遊んでいたカタカタ、Mさんからいただいた色調の美しい積み木の二つを使いました。この二つのモノはどちらも子どもの健やかな成長を願ってつくられたにちがいありません。新しいモノへ生まれ変わっても子どもたちとの物語は途絶えてほしくないと思い、ふじヶ丘保育園の収納棚に転用しようと思いました。

箱の仕切りは積み木とカタカタで作り、箱の強度は積み木で補いました。箱の中をのぞけば、かつて子どもたちが遊んだ思い出がつまっています。かつて遊んでくれた子どもたちとの思い出を懐かしみながら新しいモノになって再び子どもたちと会う日を楽しみにしていることでしょう。　（北野 真衣）

モノ：カタカタ／良い積み木

場所：ふじヶ丘保育園

人：北野 真衣

色とりどりの積み木は、カタカタの犬と交互に配され机を収納する際のガイドになるとともに、新材であるシナランバーコア同士の角に接合補助材として配すことで構造補強材としての役割も担っている。

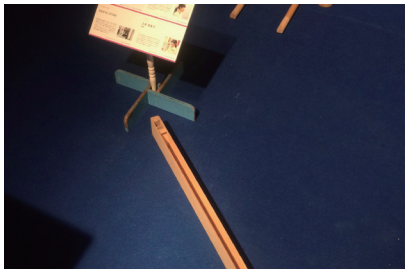
ウラモノセレモニーズ

複雑な枠組を持つモノセレモニーズを説明するために、会期中KCICで展示された一連のインスタレーションです。モノセレモニーズは、参加者12名、モノの提供は14個、場所の提供は6カ所、納品されたプロジェクトが6つと、複雑なモノと人と場所の関係が街全体に広がって展示されています。中には、寄贈されたけど使われなかったモノ、作者にはならなかったけれど手伝ってくれた参加者の方もいました。そのような今回のプロジェクトの関係を細やかに拾い上げるために、モノの裏側に焦点を当てました。（辻 琢磨）

モノ：すべて

場所：KCIC

人：辻 琢磨



寄贈されたが今回は使われなかったモノや使われたモノの端材を展示するため、それらを使われなかった部材をモノの欠片としてそのまま展示することで普段見慣れない製図板の断面や部分のかたちと向き合えるような展示を目指した。

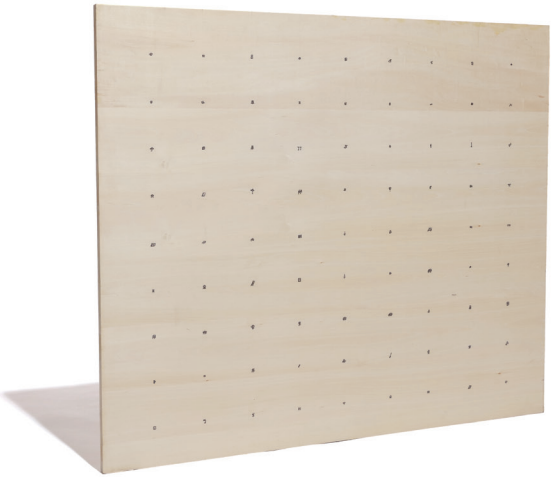
コンセプトドローイングについて

この三枚のドローイングは、画家・篠崎理一郎と建築家・辻 琢磨との協同作品で、2016年の秋にKCICを中心に開催された「モノセレモニーズ」のコンセプトを表しています。
この三枚は、人、場所、物というモノセレモニーズで扱った三つの要素をそれぞれに象徴するもので、人とモノの関係を物語として表現した「龍」、鹿児島の都市空間と雄大な桜島を表した「街」、お互いに関連なくモノが並べられた「グリッド」が、それぞれ合板に、ボールペンで詳細に描かれています。この三つの要素は、この電子書籍「動き、流れる建築のかたち」において統合されることで電子書籍上の空間でしかできない高解像度な認知体験を可能にしています。目を凝らしてよくみてください。それぞれのドローイングは圧倒的な密度と解像度で描かれており、例えば龍の絵は、遠くで見ると龍が、近くでみると人とモノが交差する物語がみえてきます。自分の視点でモノの見方が変わる、そのことに気づくと、世界全体の見方が変わるように、日常の気づきを広く与えることが、芸術の一つの価値であると、私たちは考えています。このドローイングは、それを伝えるための表現です。

篠崎 理一郎 | 画家、KCICスタッフ
1989年生まれ。鹿児島大学院理工学研究科数理情報科学専攻修了。主に黒を基調とした線で、幾何的要素を起点に建造物や人物、動物など多岐にわたるモチーフをドローイングで描く。個展やグループ展、海外のアートフェアや展示の参加、「Manhattan Portage(NY)」「無印良品」「KIRIN」「URBAN RESEARCH DOORS」といったブランドとのコラボレーション、書籍挿絵やミュージシャンのCDジャケット等の販促物のアートワークを手掛ける。
http://www.reeeeeach.com/

ドローイング／人

ドローイング／場所



ドローイング／モノ

ドローイング／人

Drawing ／ People

770mm×910mm　合板、インク

人と、モノの関係を表現したこの八岐大蛇は、8体の龍から構成され、人とモノが紡ぐストーリーによって描かれています。日本書記にも記載が確認されているように、古来日本では、龍は神聖な幻獣として崇められ、様々な物語に度々登場します。今回、この龍を「物語」の象徴として扱い、このモノセレモニーズで描かれる転用と流転の「モノガタリ」を表現しようと試みました。人が、モノと向き合い、使い方を考え、新しい息吹を与えるみずみずしい関係が描かれています。

［拡大図］

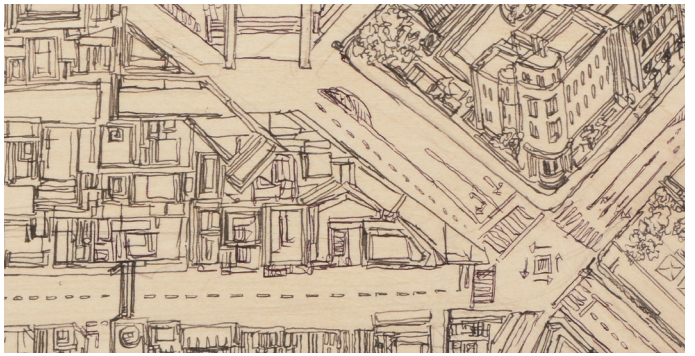
ドローイング／場所

Drawing ／ Place

1820mm×910mm　合板、インク

天文館を中心にした市街地の建物やアーケード、桜島を筆頭に市街地を囲む山々、錦江湾、路面電車といった要素によって、鹿児島の街そのものを表現した都市のドローイング。上空から見た建物や、道路、道からみた立面と、様々な角度が同一平面上に列ぶ様は、世界の展開図を表すといわれる曼荼羅をモティーフにして表現されています。「鹿児島の展開図」ともいえるドローイングです。

［拡大図］



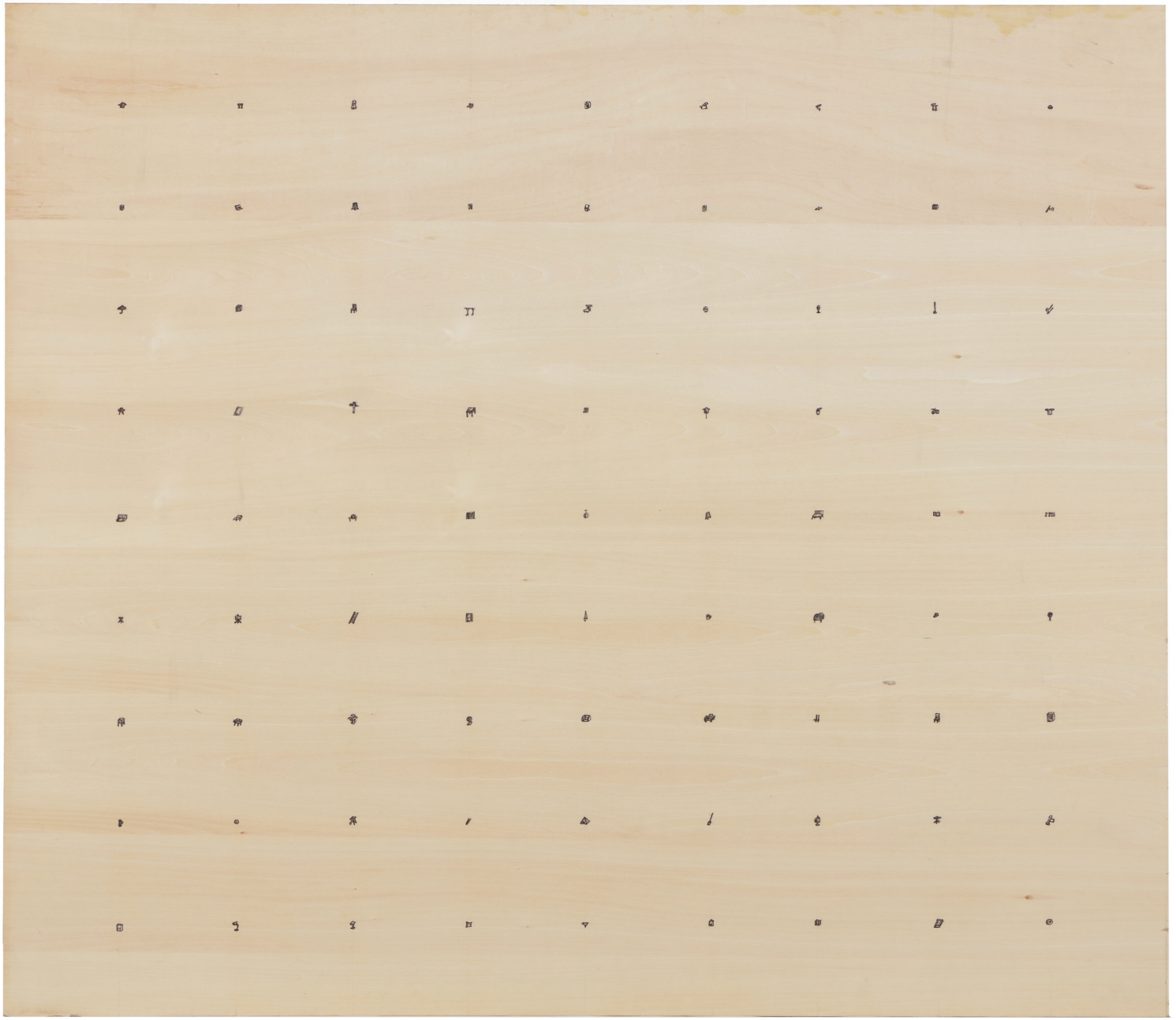
ドローイング／モノ

Drawing ／ Thing

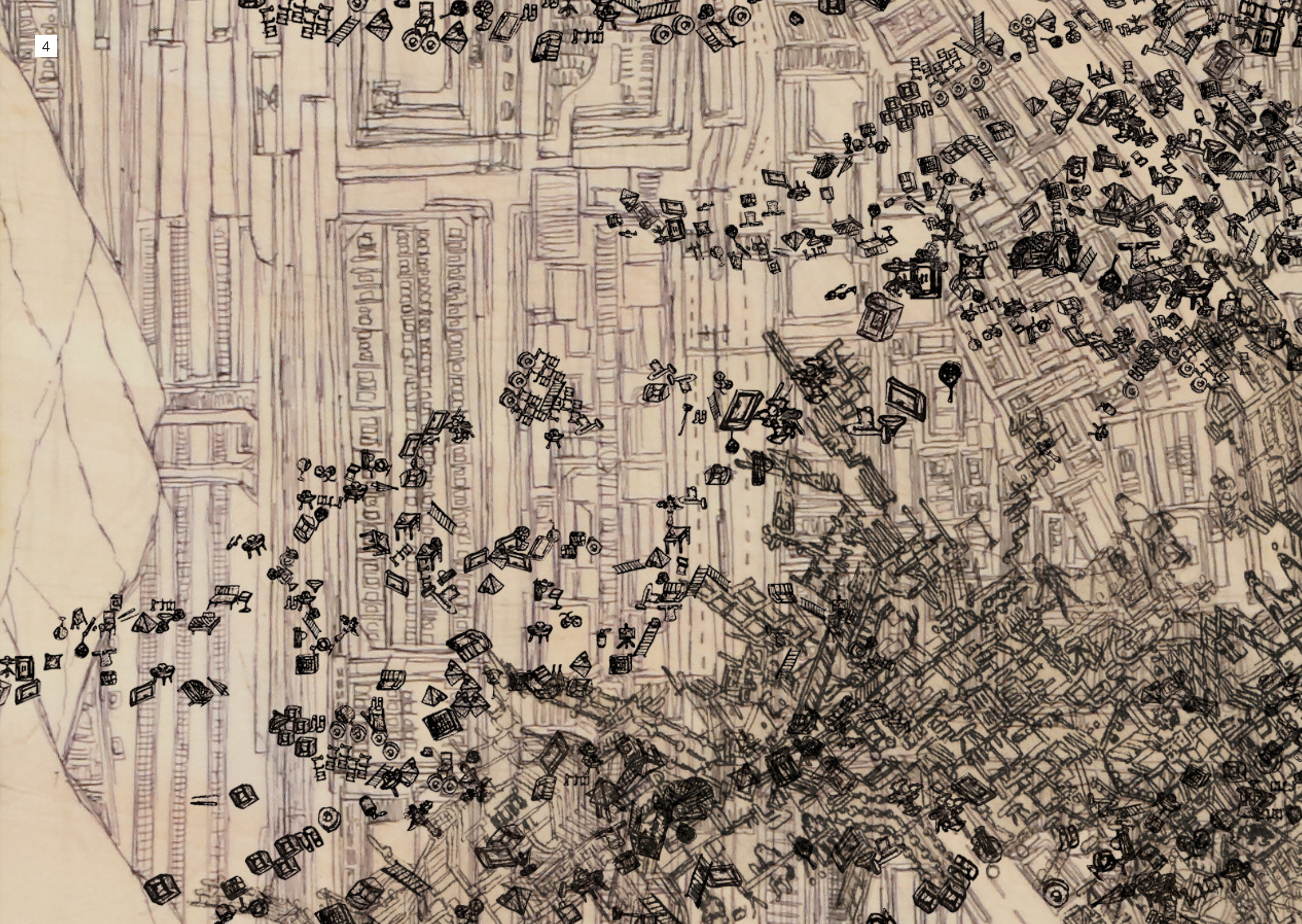
1050mm×910mm　合板、インク

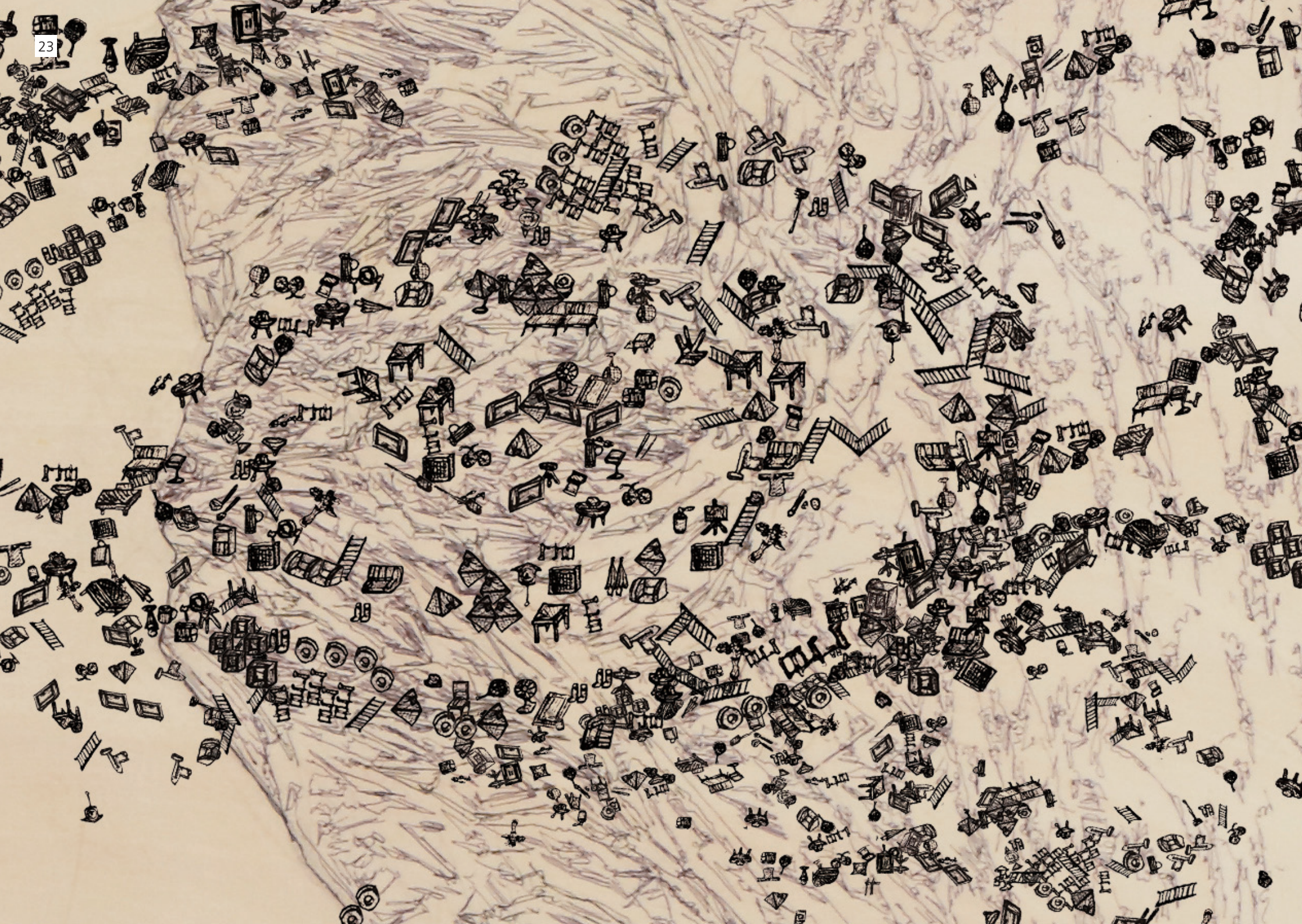
モノだけを抽出したドローイングです。グリッドに整然と、同じ大きさで並べられたそれぞれのドットはよく見ると、例えば靴、植木、扇風機、はしご、等のモノとして描かれています。モノは、単体だけではここで表現されている無機質なグリッドのようにその役割や名前が固定されている要素です。しかし解像度を上げて、丁寧にモノの特性やストーリーを理解していくと、自ずとその背後に人や、街との関係がみえてきます。

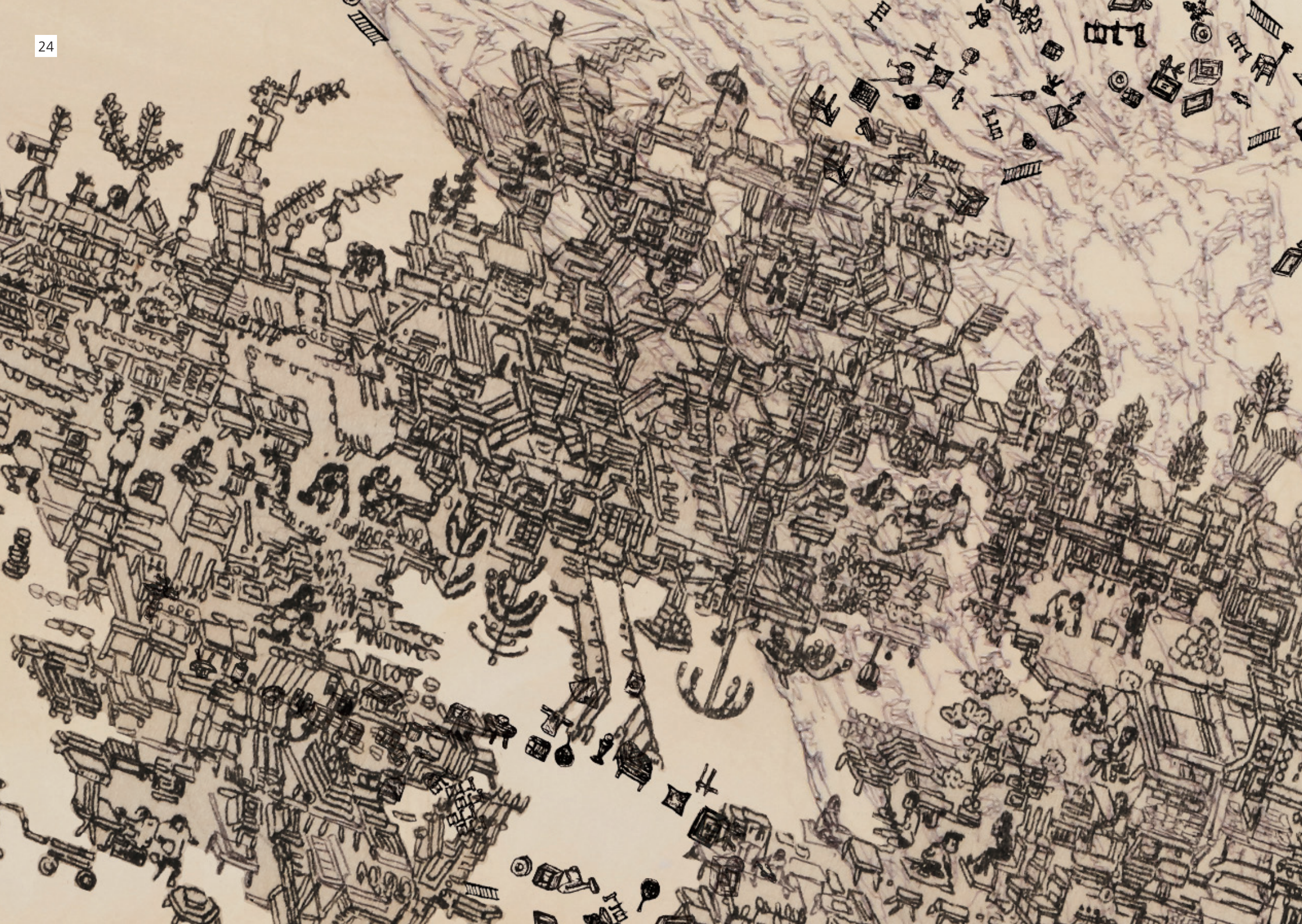
［拡大図］



このPDF上では、A4サイズを判型にして実寸大のコンセプトドローイング画像が24ページに分割され、そのページ毎に各部分を実物大で閲覧することができます。また出力して数字順に並べれば、一つの大きなドローイングを実空間でもお楽しみいただけます。画面上でも、実空間でも、それぞれのスケールでこのドローイングが描く風景を御読みください。







あとがき／歓びの連鎖

モノを寄贈した人は大切にしていたモノが供養され新たな場所で使われていくことを歓び、場所を提供してくれた人は場所を改善できたことを歓び、ワークショップに参加した人はその双方を結び合わせられたことを、モノ自身や、場所自身が主語を持つとしたら、彼らも自身の変化を歓びました。そして、僕自身も、これまで浜松で活動してきた実践がこのような形で鹿児島で結実したことを、心から歓びました。ワークショップ最終日の生誕祭では提供された場所の一つであるレトロフトのオーナー、永井夫妻のご友人がプロジェクトの一つであり、今回生まれ変わったハモンドオルガンで「歓びの歌」を演奏してくださいました。今まで私が聴いた中で、最も「歓び」を感じさせる瞬間でした。
関わる人の歓びが連鎖し続ける、素晴らしいプロジェクトを鹿児島という地で実現できたことを誇らしく思います。そもそものきっかけをくれた市村良平さんを始めとしたKCICのスタッフの皆様に、豊かな協働の機会をつくってくれた会田大也さんに、素晴らしいドローイングを作画してくれた篠崎理一郎くんに、このプロジェクトに参加してくれたすべての人と場所とモノに、電子書籍という特殊な形態の表現に参加してくれたブックデザイナーの村上亜沙美さんに、この歓びの連鎖に、そして「鹿児島さん」[fig1]に、深く感謝申し上げます。
有難うございました。

[fig1]
鹿児島のみなさん

［画像提供］

篠崎理一郎　p87-136

下薗詠子　p80 上一点

鈴木陽一郎　p39［fig8］

長谷川健太　p34［fig1］/ p36［fig4］/ p38［fig6-7］

船津和己　p59-60すべて / p66上2点 / p68上3点 / p70上2点 / p72上1点 / p74上2点 / p76上2点 / p79-80 下1点 / p81-82 / p83-84 / p85-86

宮園めぐみ　p14 / p47-50［fig2-8］/ p65 / p66下1点 / p67 / p68下1点 / p69 / p70下1点 / p71 / p72下1点 / p73 / p74下1点 / p75 / p76下1点 / p77 / p78 上1点下1点 / p138

403architecture [dajiba]　p34［fig2］/ p36［fig3］/ p38［fig5］/ p39［fig9］/ p42［fig10-12］

［著者プロフィール］

辻 琢磨　つじ たくま

建築家 ｜ 403architecture [dajiba]共同主宰

1986年静岡県生まれ。2010年横浜国立大学大学院建築都市スクールYGSA修了。

2010年Urban Nouveau*勤務。2011年メディアプロジェクト・アンテナ企画運営。

2011年403architecture [dajiba]設立。現在、滋賀県立大学、大阪市立大学、武蔵野美術大学非常勤講師。2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞*。

2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員表彰*。

*403architecture [dajiba]での受賞

動き、流れる建築のかたち
2017年3月25日　発行　初版

著者 | 辻 琢磨
発行 | かごしま文化情報センター（KCIC）出版
コンセプトドローイング制作 | 辻 琢磨+篠崎理一郎

撮影補助 | 久保雄太
ブックデザイン | 村上亜沙美
ウェブサイト（トップページ）デザイン | 古山亜人
制作協力 | 市村良平・四元朝子

©2017 かごしま文化情報センター（KCIC）

ファイルのURL
www.tsujitakuma.jp/abook/